

史料紹介 連雅堂撰『臺灣通史』訳註
—— 第四回 卷三 經營紀 —— 改訂稿

臺灣通史研究会

蔡 易達 訳

関 康祐 註

〈凡例〉

- 一. この訳註は、連横（号 雅堂）撰『臺灣通史』の現代語訳に、註釈と解説などを加えたものである。
- 二. 底本は、初版『臺灣通史』（臺灣通史社、一九一九年）とし、商務印書館版『台湾通史』（一九九六）、広
- 三. 平易な口語での翻訳を基本とし、やむを得ず難解な訳文となった場合には註を附してその理解の助

西人民出版社版『台湾通史』（二〇一一）をそれ

ぞれ参照し、引用史料の原典を調査して、これに

校勘・補正を行った。また、版本による相違は校

勘記にて示し、どの版本がどの字を使用している

かを明示した上で、本研究会の見解を示した。

三. 平易な口語での翻訳を基本とし、やむを得ず難解

な訳文となった場合には註を附してその理解の助

けとなるよう心がけた。

四、文中における（ ）記号は、その直前の語句の意味や説明を表し、〔 〕記号は文意の理解を助けるために補った言葉である。

五、原文において使用されている現在差別語ともとれる漢語に関しては、可能な限り別な表現に置き換えるよう努力したが、それが原文の語気を損なう場合や、適当な翻訳語がない場合には、その語を原文のままに使用する。

六、年号の表記に対しては（ ）記号を用いて「永曆十七（清…康熙二・一六六三）年」という形式で西暦を併記し理解の助けとした。

七、文中の難解な語句には註を附し、可能な限りその註の典拠となる史料を紹介する。

八、文中に於いて連横自身が他文献を引用している部分は、可能な限りその原典を参照し、その引用に誤りや漏れがあれば、その都度註や（ ）記号を用いて指摘する。

九、文中に於ける数値の表記に関しては、基本的に原文の表記法を尊重する。

〈詠注〉

『臺灣通史』卷三 經營紀

原文

康熙二十二年秋八月、清人既得臺灣、廷議欲墟其地。靖海侯將軍施琅不可、疏曰、

「臺灣北連吳會、南接粵嶠、延袤數千里、山川峻峭、港道紆迴、乃江、浙、閩、粵四省之左護。隔澎湖一大洋、水道三更。明季設水師標於金門所、出汛至澎湖而止、水道亦有七更。臺灣一地、原屬化外、土番雜處、未入版圖也。然其時中國之民潛至、生聚於其間者、已不下萬人。鄭芝龍爲海寇時、以爲巢穴。及崇禎元年、芝龍就撫、將此地稅與紅毛、爲互市之所。紅毛遂聯絡土番、招納內地人民、成一海外之國、漸作邊患。至順治十八年、爲鄭成功所攻破、盤踞其地、糾集亡命、窺伺南北。及其孫

克塽、六十餘年無時不仰屋宸衷。臣奉命征討、親歷其地、備見野沃土膏、物產利溥、耕桑并耦、漁鹽滋生、滿山皆屬茂樹、遍處俱植修竹。硫磺水簾、糖蔗鹿皮、以及一切日用之需、無所不有。向之所少者布帛爾、茲則木棉盛出、經織不乏。且舟帆四達、絲縷踵至、飭禁雖嚴、終難杜絕。寔肥饒之區、而險阻之域也。一旦納土歸命、此誠天以未闢之方輿、資皇上東南之保障、永絕邊海之禍患、豈人力所能致哉。

夫地方既入版圖、民番均屬赤子、善後之計、尤宜周詳。此地若棄爲荒陬、複置度外、則今臺灣人居稠密繁息、農工商賈各遂其利、一行徙棄、安土重遷、失業流離、殊費經營、寔非長策。況以有限之船、渡無限之民、非閱數年、難以報竣。使載渡不盡、苟且塞責、則深山窮谷、竄伏潛匿、寔繁有徒、和同土番、從而嘯聚。假以內地之逃軍流民、急則走險、糾黨爲患、造船制器、剽掠海濱。此所

謂藉寇兵而齎盜糧、固較著也。且此地原爲紅毛所居、無時不在貪涎、亦必乘隙以圖。一爲所有、彼性狡黠、善爲鼓惑。重以來販（夾板）船隻、制（製）作精堅、從來無敵於海外。若得此數千里之膏腴、必倡合黨夥、竊窺邊場、迫近門庭、此乃種禍。將來沿邊諸省、斷難晏然無虞。至時動師遠征、兩涉大洋、波濤不測、恐未易建成效。如僅守澎湖而棄臺灣、則澎湖孤懸海外、土地卑薄、異於臺灣、遠隔金廈、豈不受制於人？是守臺灣即所以固澎湖也。臺、澎聯爲臂指、沿海水師汛防嚴密、各相犄角、聲氣關通、應援易及、可以寧息。昔日鄭氏得以負抗者、以臺灣爲老巢、澎湖爲門戶、四通八達、任其所之；我之舟師往來有阻。今地方既爲我得、官兵棋布、風期順利、片帆可至、雖有奸萌、不敢復發。臣業與部臣、撫臣會議、而部臣、撫臣未履其地、棄留未決。臣閱歷周詳、則不敢遽議輕棄也。且海氛既靖、內地溢設之兵、盡可陸續裁減、以之

分防臺、澎兩處。臺灣設總兵一員、水師副將一員、陸師參將二員、兵八千名。澎湖設水師副將一員、兵二千名。計兵一萬、足以固守、又無添兵增餉之費。其防守總兵、副、參、遊等官、定以三年或二年轉陞內地、無致久任、永爲成例。然當此地方初闢、正賦、雜餉似宜蠲豁。現在一萬之兵食、權行全給。三年後開徵、可以佐需。抑且寓兵於農、亦能濟用、可以減省、無盡資內地之轉輸也。蓋籌天下之形勢、必求萬全。臺灣一地、雖屬外島、寔關要害。無論彼中耕種、猶能少資兵食、固當議留；即爲不毛之壤、必藉內地輓（挽）運、亦斷不可棄。棄留之際、利害攸關；臣思棄之必釀成大禍、留之誠永固邊疆。是以會議具疏之外、不避冒瀆、以其利害自行詳陳」。

詔曰「可」。設府一、縣三、隸福建。府曰臺灣、附郭亦曰臺灣、南曰鳳山、北曰諸羅、而澎湖置巡檢。設臺厦兵備道駐府治、兼理提督學政按察使司事、分汛水

陸、爲海疆重鎮矣。十一月、雨雪、堅冰寸餘。

現代語訳

康熙二十二（一六八三）年秋八月、清朝は既に台湾を得た。朝廷で議論してその地を廢墟にしようとした。靖海侯將軍施琅（注二）は同意せず、上疏して言った。

「台湾は北に呉郡または会稽郡と連なり、南に嶺南と接しており（注三）、広さは数千里に延びております。山は高く険しく川の流れは急激であり、港の水路も迂回しており、このため江蘇、浙江、福建、広東四つの省の左護となります。澎湖島とは大きな海で隔たり、航路は三更（注三）（一更…六十里）あります。明の時代に金門所で水師標を置き、舟を出しても澎湖島で止まりました。金門からの距離は七更もあります。台湾はもともと徳化の外にある地域で、土人と番族は雜居して未だに版圖に入れていません。しかし、その時代でも中国か

ら民がひそかに至り、その地に人口を増やし集落を造り、既に一万人を下りませんでした。鄭芝龍が海賊をしていた時、ここを巢窟にしておりました。崇禎元（一六二八）年、鄭芝龍は朝廷の招撫に就き、この地を紅毛人に貸し、互市の場所にしました。紅毛人はいかに土人と番族に連絡し内地の民を招き、一海外の国となり、だんだんと辺境の患いとなりました。順治十八（一六六一）年に至り、鄭成功によって攻略されました。鄭成功はその地に勢力を張り、亡命の徒を集め、中国南北の隙を窺って事を起こそうとしていました。その孫・克塽に至るまでの六十余年間、謹んで明朝の天子の大御心を仰がない時はありませんでした。臣は勅命を奉じ自らその地に臨んでみたところ、原野は灌溉され土壤は肥沃、物産の利は多く、農業も養蚕ともに盛んになり、漁業も製塩業も盛んであります。山一面に樹木が茂り、至る所高い

竹が植えられています。また、硫黄、水籐、甘蔗、鹿革ないし日常の必需品はすべて揃っております。昔、織物の生地だけ不足していたのでありますが、近年木綿は盛んに産出しており、紡績に乏しくありません。そのうえ船舶海運が四方に発達し、絶えず後からやってきます。厳しく取り締まりを行っておりますが、どうしても根絶できません。実際台湾は豊穡の地でありながら地勢の険しいところでもあります。いったん納土帰命（版図返上し天命に帰順）すれば、これぞ天が未開の地方を与え、皇帝の東南の保障に資するものであり、永く海浜の禍患を絶つこととなります。どうしても人力でどうこうすることができませんか。

そもそも地方が版図に入りましたら、住民も番族も均しく皇帝の赤子となります。善後の計はもつとも周到綿密にすべきであります。もし、ここを棄てて荒涼の地と為してまた度外に置けば、

今台湾では人口が密集し繁殖しており、農工商業がそれぞれ利益を追っているため、放棄し移住させることを行ったら、住み慣れた土地を離れたがらない者や失業し流浪の民が出てきて、殊に経営が煩わしく実に良策ではありません。ましてや限られる船舶をもつて無限の民を渡すことは、数年間も経らなければ完成し難しいことです。仮に船舶で移住し尽くせなくて「官吏が」手抜き仕事でいい加減に対応したら、「流民が」山の奥地に逃げて隠匿潜伏するでしょう。実際徒党を増やし、土民、番族と合流し、集団を形成しています。また、たとえば内地の逃走兵士や流民たちが抑圧されると危険なことに走り、徒党を集め患を為します。また船舶や武器を造り、海浜の地を略奪することになります。これはいわゆる「賊兵に武器を貸し糧食を匪徒に齎す」であり、もとより明らかなこととです。なお、昔ここは紅毛人が居住し、喉から

手が出るほどこの土地を欲しがっているため、また必ず隙に乗じて（奪取を）計るでしょう。いったん彼らの所有になったら、狡猾（ずるく悪賢い）で扇動に長じている性質をもつ彼らは、重ねて精巧に制作された船舶をもつて、今まで海外において無敵となっております。もし、この数千里に亘る肥沃な土地を得たら、必ず徒党を呼び合わせ、ひそかにわが辺境を窺い、（朝廷）の門戸まで迫ります。これは禍を植えることであります。将来沿海部の諸省は断じて安全無慮とはいえないことになります。そのとき、軍隊を動かし遠征しても、2つの海を渡るため潮波は測れず、恐らく効果をたてることは易しくないでしょう。仮に澎湖島だけ守って台湾を棄てれば、すなわち澎湖島は独りで海外にあり、また土地も貧乏で台湾と異なり、金門やアモイから遠隔で、どうして他人に制されることがないと言えるでしょうか。これがために

台湾を守ることにはすなわち澎湖島を固める所以でもあります。台湾と澎湖島が腕と指のごとく連なっており、沿海部の水師要塞を厳密にすれば、互いに支援ができ、通信連絡をしやすく応援も簡単に及ぼせます。こうすれば安らぐことができるでしょう。かつて鄭氏がここで抵抗できたのは、台湾を本拠地に澎湖島を門戸にして、四方八方に通じており自由に行き来することができたためであり、わが水師の往来の妨げとなっておりました。今この地方は既に我がものとなり、將兵を各地に駐屯させたら、風の吹き方によって容易に着くことができます。仮に奸人の邪念の芽があっても敢えて事を起こしはしないでしょう。

わたくし
臣（施琅）は既に中央の官僚、巡撫と會議をしました。彼らは台湾に踏み入ったことがないため、放棄するか否かを決めることはできません。臣はその地にながくいて熟知しているので、

敢えて放棄することを軽々しく提議はしませんでした。さらに海外の気運は既に安定し、内地で余剰となった兵士はすべて減らし、これを分けて台湾と澎湖島を防衛させるべきです。台湾に総兵を一員、水師副将を一員、陸師参将を二員、兵を八千設け、澎湖島には水師副将を一員、兵を二千設けます。合計一万の兵があれば固守するには十分であり、また兵や給料を増やす手間もかかりません。防衛に当たる総兵、副将、参将、遊撃などの官僚は、三年もしくは二年の任期をもって内地に転任することとし、長く赴任させないことを今後の成例とします。しかし、この地は開拓したばかりなので賦税、雑税は広く減免したほうが良いかと思えます。現在一万名の兵糧は便宜的に全額給与しますが、三年後徴税を開始すれば需要を助けることができます。また屯田制の実施もまた管理運用の一助となります。これをもって節約する

ことができますし、すべて内地の運輸に助けられることがなくなるでしょう。そもそも、天下の形勢をはかるときは、必ず万全を期すことを求めるものです。台湾の地は、外洋に属する島といえども實際要衝に関わっている土地です。無論その地で農業を営むことはこれまでどおり少なからず兵糧に資することができます、もとより議して留保すべきであります。たとえ不毛の地になっても必ずや内地の運輸に頼ることができるので断じて放棄するべきではありません。放棄か留保かの判断する際には利害が関わります。臣は、放棄すれば必ず大禍を醸成し、留保すれば辺境が永く固まると考えております。従って、これをもって會議し疏を用意したことは非難を受けるべきであります。その利害を以て自ら詳細を申し上げます」。

詔が下り「よ可し」とされた。一府三県を設けて福建に属させた。府は台湾府といい、府城の付近は台湾県

と呼ぶ。「台湾県」南は鳳山県といい、北は諸羅県という。また澎湖島に巡検司^(注四)を置いた。台厦兵備道^(注五)を設け、府の所在地に駐屯させ、提督学政按察司事^(注六)を兼理させた。それぞれ水陸を防衛し海辺の重鎮となった。十一月、降雪し、氷が一寸あまり張った。

(注一) 施琅(一六二一―一六九六)福建泉州府晉江県の人。

字は琢公、尊侯、泰舒。初め鄭芝龍の配下であったが、順治三(一六四六)年に鄭芝龍が清に降るとそれに従って投降。鄭成功による南明への誘いを断つたことで家族が捕われたが、それを拒否し、家族は皆殺しとなった。『清史稿』巻二百六十に列伝がある。

(注二) 粵嶠…五嶺以南の地域。南嶺山脈は、中華人民共和国の南部を東西に伸びる山脈。広西チワン族自治区および広東省の北部、湖南省および江西省の南部を走る中国南部最大の褶曲山脈で、長江水系と珠江水系の分水嶺で

あり、華中と華南の境界をなしている。南嶺山脈の南側(嶺南、華南)は亜熱帯の気候で、稲の二期作が盛んになっている。別名は五嶺山脈といい、西から東の順に、越城嶺、都龐嶺、萌渚嶺、騎田嶺、大庾嶺の五つの山並みが組み合わさっているためこの名がある。中原の政治的支配や文化が十分に及ばない時期もあり、華北の人間は嶺南を「蛮夷の地」と呼んできた。

(注三) 三更…『福建通志』台湾府疆域に「臺灣府在東南大海中、距省一千二百里」とあり、注に「水行自鹿耳門至澎湖水程四更、自澎湖至廈門水程七更。舊志以六十里爲一更、計六百六十里」とある。

(注四) 巡検司…元、明、清朝において県衙門の下にある行政組織であり、巡司と略されることもある。元朝に設立される当初、人口の少ない地域を管轄する非常設組織であったため、行政的裁量権を持たないほか、常設の主官もなかった。主に軍事的な目的を持っている機構である。

(注五) 兵備道…官職名。明朝、各省の要所に設けて軍備を

管理した道員。清朝も踏襲した。

〔注六〕提督學政按察司事。清の初期、明朝の旧制に沿って「提學道」を設けて按察司に属す。康熙四十二年、提督學政に改めた。翰林院や監察御史で充てゐる。定員なし。

原文

二十三年春、文武皆就任、乃大計稅畝。有田七千五百三十四甲、園一萬零九百十九甲、戸一萬二千七百二十七、口二萬六千八百二十人。琅奏請減賦、下旨再議。於是奏定上則田每甲徵粟八石八斗、園四石、每丁徵銀四錢七分六厘、著爲例。初、延平郡王成功克臺之歲、清廷詔遷沿海居民、禁接濟、至是許開海禁、設海防同知於鹿耳門、准通商；赴臺者不許攜眷。琅以惠、潮之民多通海、特禁往來。是年建臺灣、鳳山兩儒學。

二十四年、建臺灣府儒學、就鄭氏舊址擴而大之、中爲大成殿、祀孔子、以春秋上丁行釋菜之禮。

二十五年、總督王新命巡撫張仲舉奏准、歲進文武童各二十名、科進文章二十名、廩膳生二十名、增廣生如之、歲貢一人。

現代語訳

康熙二十三年（一六八四）年春、文武官僚が台湾に全員着任した。そこで大がかりに税と土地を計上した。田は七千五百三十四甲、畑は一万九百十九甲、戸数は一万二千七百二十七、人口は一万六千八百二十人あった。施琅は減賦を上奏したが、再度議論するように命が下された。これによって、上則田は甲当たり稲穀八石八斗、畑は四石を徴収し、壮丁は一人当たり銀四錢七分六厘を徴収することを上奏して定めた。当初、延平郡王鄭成功が台湾を攻略した年から、清朝は勅命を下し沿海部の居住民を移動させて台湾を援助することを禁じた。ここに至り、海禁を開くことを許し、鹿耳門〔注七〕に海防同知〔注八〕を設け、通商することを許可

した。ただし、台湾に赴く者は家族を同行させることが許されなかった。施琅は、惠州と潮州の民が海に精通しているため、特に台湾との往来を禁じた。この年、台湾と鳳山に二つの学校が建てられた。

康熙二十四（一六八五）年、台湾府に学校が建てられることとなり、そこで鄭氏の旧跡を拡大して利用した。その中に大成殿を作って孔子を祀り、春秋の上丁^{〔注九〕}の日に釈菜の礼を行った。

康熙二十五（一六八六）年、総督王新命^{〔注一〇〕}と巡撫張仲拳^{〔注一一〕}が、毎年、文武童生を各二十名推挙させ、科挙の文童生^{〔注一二〕}を二十名、廩膳生^{〔注一三〕}二十名、増広生も同じ定員とし毎年貢生^{〔注一四〕}を一人挙げるように上奏し、許可した。

〔注七〕鹿耳…『福建通志』巻四・山川・台湾府に「鹿耳門在臺灣港口。形如鹿耳」とあり、現在の台南市安南区鹿耳門。

〔注八〕海防同知…清朝の官職名。知府の補佐官である。清朝は、沿海地域の要所の府、庁に「海防同知」を設け、それぞれの府、庁の長官を補助して沿海部の防衛事務を管轄する。全国で十四名を置いた。

〔注九〕上丁…旧暦毎月上旬の丁日。『禮記』月令に「（仲春之月）上丁、命樂正習舞、釋菜」（季秋之月）上丁、命樂正入學習吹」とある。唐以降、歴代王朝が、毎年仲春（二月）と仲秋（八月）の上丁之日を孔子祭祀の日と規定した。

〔注一〇〕王新命…康熙二十三（一六八四）年から二十六年（一六八七）年まで、両江総督として江蘇、安徽と江西三省の軍・民政務を管轄した。のちに閩浙総督に就く。『福州府志』巻三十職官三、国朝文職、総督巡撫に「王新命四川人、康熙二十四年任。」とある。

〔注一一〕張仲拳…康熙十六（一六七七）年、泉州府知府に就き、康熙二十五（一六八六）年、福建巡撫に昇進した。『福建通志臺灣府』職官、巡撫に「張仲舉、鑲紅旗漢軍人、

二十五年任。」とある。

〔注三〕童生…明清時代の科挙で県試には合格したがまだ郷試を受験していない、または合格していない者。

〔注三〕廩膳生…即ち廩生。廩膳とは、政府が生員（秀才）に配る膳食の手当て。『明史』選舉志一に「先以六等試諸生優劣、謂之歲考、一等前列者、視廩膳生有缺、依次充補、其次補增廩生」とあり、『清史稿』選舉志一に「生員色目、曰廩膳生、增廩生、附生」とある。

〔注四〕貢生…明清両代に生員の優秀な者で、国子監で学ぶことを許可された者を指す。

原文

二十六年、臺人始應福建鄉試。

二十七年、始鑄康熙錢。明太僕寺卿沈光文卒於諸羅。

二十八年。

二十九年冬、大有年。

三十年秋八月、大風、壞屋碎船。

三十一年、停鑄康熙錢。

三十二年冬、大有年。

三十三年、初修臺灣府誌成。

三十四年、知府靳治揚始設熟番社學。

三十五年秋七月、新港吳球謀起事、不成、被殺。

三十六年、仁和郁永河始至北投煮礦、遍歷番社。

三十七年。

現代語訳

二十六（一六八七）年、台湾人は福建の郷試を受けられるようになった。

二十七（一六八八）年、康熙錢を鑄造し始めた。明

の太僕寺卿沈光文〔注五〕が諸羅で卒した。

二十八（一六八九）年。

二十九（一六九〇）年冬、豊作であった。

三十（一六九一）年秋八月、大風があり、家屋や船を壊した。

三十一（一六九二）年、康熙錢の鑄造を停止した。

三二（一六九三）年冬、豊作であった。

三十三（一六九四）年、初めて『臺灣府誌』が編纂された。

三十四（一六九五）年、知府の靳治揚^{（注一六）}は初めて熟番の社学を設けた。

三十五（一六九六）年秋七月、新港の呉球は蜂起を謀ったが、成功せず殺された。

三十六（一六九七）年、浙江省仁和の郁永河^{（注一七）}が初めて北投^{（注一八）}に至り硫黄を煮た。番社を訪ね歩いた。

三十七（一六九八）年。

^{（注一五）} 沈光文…万曆四十（一六一二）年浙江省の鄭県に生まれる。科擧の明経科に合格し、太学生になった。南明の福王政権で工部郎に、福王政権が滅ばされた後は、広東の桂王の下で太僕寺少卿に就く。永曆十五（一六六一、

清順治十八）年、鄭成功が台湾を攻略した後、沈光文も台湾に入り、一六八八年に死去した。『文開文集』、『流寓考』、『臺灣賦』、『草木雜記』、『臺灣輿圖考』等、台湾に関する著作を残した。『清史稿』卷五百列伝二百八十七に伝がある。

^{（注一六）} 靳治揚…『續修臺灣府志』卷三職官に「鑲黃旗人。歷漳州知府。康熙三十四年、知臺灣府。……臺人請祀名宦。後陞廣東肇高廉羅道」とある。

^{（注一七）} 郁永河…『續修臺灣府志』卷十一流寓に「字滄浪；浙江仁和諸生。好遠遊、意興甚豪、遍歷閩幕。康熙丁酉、以采礦來臺。著『裨海紀遊』一書、多摭拾臺中逸事；所賦詩、亦有可傳者」とある。また、『續修臺灣縣志』卷六藝文にも同様の記事がある。康熙三十五（一六九六）年冬、福建福州の火薬局が火災にみまわれ、管理者の王仲千が責任を負うこととなり、王仲千の幕賓であった郁永河は台湾北部の北投に赴き、硫黄を採取することになった。郁永河は一六九七年二月に福建を出発し、台南

に上陸。現地で硫黄採取に従事する人員を募集し、四月に四七名の作業員を率いて台北淡水庁（現在の新竹）に向かい、更に四月二十日前後には北投に入り硫黄の採取を開始した。硫黄採取は七箇月に及び福建には十月二十日に戻っている。（呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、五二頁）。

〔注一八〕北投…現在の台北市北投区周辺。

原文

三十八年春二月、吞霄土官卓介（個）、卓霧、亞生作亂。夏五月、淡水土官冰冷亦起應。秋七月、水師至淡水、執冰冷殺之。八月、署北路參將常泰以岸裡番擊吞霄、禽卓介（個）、卓霧、亞生以歸、斬於市。

三十九年、詔賜明延平郡王鄭成功及子經歸葬南安、置守塚、建祠。

四十年冬十二月、諸羅劉却起事、燬下茄冬營。附近熟番亦亂。伐之、却敗走。四十一年。

四十二年春二月、劉却復謀起事、不成、被殺。

四十三年、建崇文書院。

四十四年、冬飢、詔蠲三縣糧米。

四十五年、建諸羅縣學。

四十六年、冬飢、詔蠲糧米十分之二。

四十七年、泉州人陳賴章與熟番約、往墾大佳臘之野。

是爲開闢臺北之始。

四十八年。

四十九年、始設淡水防兵、定三年一換。

現代語訳

三十八（一六九九）年春二月、吞霄社土官の卓介（個）、卓霧、亜生が反乱を起した。夏五月、淡水社土官の冰冷も乱に呼応した。秋七月、水師が淡水に至り、冰冷を捕え殺した。八月、北路参将常泰〔注一九〕を派遣し岸裡社〔注二〇〕の番族を以て吞霄社を襲撃した。卓介（個）、卓霧、亜生を生け捕りにして帰還し、市で斬った。

三十九（一七〇〇）年、明延平郡王鄭成功及び子の鄭經を福建省南安に帰葬させ、墓守を設けて祠を置くように、という詔勅を賜った。

四十（一七〇一）年冬十二月、諸羅県の劉却が反乱を起し、下茄苳宮^{（注二）}を焼いた。近辺にいる熟番も反乱を起した。これを討伐し、劉却は敗走した。

四十一（一七〇二）年。

四十二（一七〇三）年春二月、劉却が再び反乱を起そうと謀ったが、成功せずに殺された。

四十三（一七〇四）年、崇文書院^{（注三）}を建てた。

四十四（一七〇五）年冬、飢饉が発生したため、三県（諸羅、台湾、鳳山）の年貢を免除する、と詔勅が下された。

四十五（一七〇六）年、諸羅県に学校を建てた。

四十六（一七〇七）年冬、飢饉が発生したため、年貢の十分の二を減免する、と詔勅が下された。

四十七（一七〇八）年、泉州の人陳頼章^{（注三）}が熟

番と契約を結び、大佳臘^{（注四）}の平野を開墾した。これは台北の開闢の始まりである。

四十八（一七〇九）年。

四十九（一七一〇）年、淡水庁に防兵を設け始め、三年に一交代と定めた。

^{（注一）} 常泰…満洲纓藍旗の人、反乱鎮圧後、福建漳州鎮総兵に昇任。『晉江縣志』卷二十九職官志、武秩に記事がある。

^{（注二）} 岸裏社…岸裡（Ahooboo）社とも。平埔族のバゼー族に属す。現在の台中市神岡区にあった。

^{（注三）} 下茄苳宮…現在の台南市後壁区嘉冬里周辺。

^{（注四）} 崇文書院…台湾知府の衛台揆が台湾府東安坊府（今の台南市）に建てた義学。台湾知府が諸羅県蘆竹角に田を置き、地租を以て学院の所用に充てた。『臺灣通史』教育志にも出る。

^{（注五）} 陳頼章…中国泉州人の陳逢春、頼永和、陳天章、陳

憲伯、戴天樞等が康熙四十八（一七〇九）年に、台北地域を開拓するため創立した屋号であり、人名ではない。

諸羅県政府から開墾許可証を発給され、大佳臘の開墾を行った。（呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、五四～五五頁）。

〔注二四〕大佳臘…一名、大加蚋または大佳蚋。または大佳臘ともする。清朝時代から日本統治時代にかけて台湾北部にあった行政区画。現在の台北市にあたる範囲。『雅堂文集』卷二に「大稻埕原名大佳臘、番語也、華言曝穀場」とある。

原文

五十年、建萬壽宮於府治。

五十一年、詔蠲本年租穀。

五十二年、詔以五十年丁冊爲準、滋生人口永不加賦。

北路營參將阮蔡文親赴竹塹、大肚諸社、撫慰番黎。

五十三年夏、郡治大火、燬數百戶。秋大旱、詔蠲臺、

鳳兩縣租穀十分之三。是年、命天主教神甫買刺來臺測量經度。

五十四年、總督滿保奏言：臺灣遠屬海外、民番雜處。

自入版圖以來、所有鳳山縣之熟番力力等十二社、諸羅縣之熟番蕭壠等三十四社、數十餘年、仰邀聖澤、俱各民安物阜、俗易風移。今據臺灣鎮道詳報：南路生番山猪毛等十社四百四十六戶、北路生番岸裡等五社四百二十二戶、俱各傾心向化、願同熟番一體內附。每年各願納鹿皮五十張、各折銀十二兩、代輸貢賦、載入額編、就臺充餉、此外不得絲毫派擾。以彰懷遠深仁。詔可。自後生番多內附。

五十五年夏五月、福建巡撫陳璘奏言防海之法。岸裏社土目阿穆請墾貓霧揀之野、諸羅知縣周鍾瑄許之。是爲開闢臺中之始。

五十六年、冬飢、詔蠲本年租穀十分之三。

五十七年。

五十八年、初修鳳山縣誌成。

五十九年、建海東書院。冬十月朔、地大震。十二月八日、地又震、凡十餘日、壞屋殺人。詔免番民銀米。

現代語訳

五十（一七一）年、台湾府に万寿宮を建てた。

五十一（一七二）年、今年の年貢を免除する、と詔勅が下された。

五十二（一七三）年、康熙五十年の丁冊（杜丁名簿）を基準に、その後増えた人口には永遠に税金を課さないように、という詔勅が下された。北路営參將阮蔡文（注二五）は自ら竹塹（注二六）、大肚（注二七）諸社に赴き、番黎（先住民族）を慰撫した。

五十三（一七四）年夏、政府の所在地（台南？）に大火が起き、数百戸を焼いた。秋に大旱が起きたため、台湾と鳳山両県の年貢の十分の三を減免する、と詔勅が下された。この年、天主教の神父マイラー（買刺、Joseph-Francois-Marie-Anne de Moyriac de

Mailia）に命じて台湾に行かせ、経度の測量をさせた。

五十四（一七五）年、閩浙総督滿保（注二八）が上奏した。「台湾は遠く海外に属し、民と番族が雑居しています。版図に入れられて以来、鳳山県の熟番力力（注二九）等の十二社、諸羅県の熟番蕭壠（注三〇）等三十四社のすべては、ここ数十年の間、皇帝の聖沢を仰ぎ、それぞれ平和に暮らし物産も豊かになり、風俗も変わりました。現在、台湾の鎮・道から、南路の生番（山地先住民）の山猪毛（注三一）等十社の四百四十六戸、北路の生番の岸裡等五社の四百二十二戸は、すべて教化に心を傾け、熟番と一体となり帰順することを願っているという詳細な報告がありました。毎年貢賦（年貢）に代わってそれぞれ鹿皮五十枚、換算して銀十二両を上納したいと願っているため、額編（帳簿）に記載し台湾での軍糧に充てることにします。これ以上は少しも（増額の）騷擾をせず、以て聖主の懷遠深仁を彰わすべきです」。詔が下り「可」とされた。この後、

生番の帰順が多くなった。

五十五（一七一六）年夏五月、福建巡撫陳瓚（注三二）が防海の法を上奏した。岸裏社土目の阿穆（注三三）が猫霧揀（バブサ）の平野を開墾することを請うた。諸羅知県の周鍾瑄（注三四）は許可した。これは台中の開闢の始めである。

五十六（一七一七）年冬、飢饉が発生したため、本年の年貢の十分の三を減免すると、詔勅が下された。

五十七（一七一八）年。

五十八（一七一九）年、初めて『鳳山縣誌』が編纂された。

五十九（一七二〇）年、海東書院を建てた。冬十月朔日に大地震が起きた。十二月八日にまた地震が起き、おおよそ十数日にわたった。家屋が倒壊して人が死亡したため、番族と民の年貢を免除すると、詔勅が下された。

（注三五）阮蔡文…『淡水廳志』卷九武職に「阮蔡文、字子章、漳浦人、寄籍江西。康熙庚午科舉人、以知縣需次。……五十四年、調臺灣北路參將、戢士卒、撫番黎、整飭部伍、增置要害塘汛、鼠竊盡遁。其親啗淡水也、山谷諸番、獻牛羊酒食、絡繹於道、文悉慰諭遣還。……尋升福州副將、赴京道卒」とある。また、『福建通志臺灣府』水師提督總兵官には、「阮蔡文、漳浦文舉人、五十四年任水師提督總兵官」とある。

（注三六）竹塹…現在の新竹周辺。一七三三年淡水同知徐治民により、竹を材料に築城され、一八二六年に立て直しを行い、四つの門を備えた、石とレンガ造りの城に改築された。一八七五年、竹塹から新竹と改名し、竹塹城も新竹城へと改まった。日本時代の一九〇二年、都市計画のため、城壁や南門などが取り壊され、現存するのは、修復された東門城のみである。

（注三七）大肚…大肚番。現在の台中市大肚区で生活していた

原住民。鄭成功の頃より反乱を起こしていた。

(注二八) 覚羅滿保（一六七三～一七二五）…愛新覺羅氏、号は鳧山、満洲正黄旗の人。康熙三十三（一六九四）年進士に合格、国子監祭酒、内閣学士を歴任した後、康熙五十（一七一）年に福建巡撫、五十四（一七一五）年に閩浙総督に抜擢された。雍正三（一七二五）年、官で卒した。『續修福建臺灣府志』卷十五名宦に記事がある。

(注二九) 力力…力力社（オランダ語：Neme）。漢化された平埔族のひとつであるシラヤ族に属し、消えた「鳳山八社」の一つと称された。現在の屏東崁頂郷、潮州鎮及び万巒郷一带にあった。

(注三〇) 蕭壟…現在の台南市佳里区周辺。

(注三一) 山猪毛…台湾中央山脈南段の西側、現在の三地門郷。もともとパイワン族のサチモール（Satinmor）社の領域。従来、「漢番交易」が頻繁に行われる場所のため、康熙年間から「帰化生番」に属された。閩南人は「山猪毛社」と訛る。

(注三二) 陳瓊（一六五六～一七一八）…字は文煥、号は眉川、広東雷州海康県の人。福建巡撫兼閩浙総督。『臺灣通史』卷三十四列伝六循吏に伝がある。

(注三三) 阿穆…一名、阿莫、または阿睦。生没年不明。

(注三四) 周鍾瑄…『重修臺灣府志』卷三に「貴州貴築人、甲子舉人。康熙六十一年任臺灣縣知縣。編諸羅縣志」とある。

原文

六十年夏五月、朱一貴起事岡山、破府治、總兵歐陽凱、副將許雲皆死、南北俱應。一貴稱中興王、建元永和、復明制。總督滿保聞報、馳赴厦門、檄南澳鎮總兵藍廷珍出兵、會水師提督施世驃伐臺。六月、克鹿耳門、迫府治、一貴戰不利、被擒、械至京、磔之、餘黨亦漸平。八月、大風壞民居、天盡赤、軍民多溺死、詔蠲徵穀、發帑賑卹。時廷議移臺鎮總兵於澎湖、而設陸路副

將於府治、裁水陸兩中營歸內地。廷珍力爭不可、爲書滿保止之、提督姚堂亦以爲言、乃罷議。特命滿漢御史各一員、歲巡臺灣、察民疾苦。

六十一年夏五月、御史吳達禮、黃叔璥至自京師。滿保以沿山一帶易藏姦宄、命附山十里以內民居勒令遷徙、自北路起至南路止築長城以限之、深鑿濠塹、永以爲界、越界者以盜賊論。廷珍復上書止之、乃飭沿山各隘立石爲界、禁民深入。是年阿里山、水沙連各社番皆就撫。夏、鳳山赤山裂、火光丈餘。

現代語訳

六十（一七二二）年夏五月、朱一貴^{（注三五）}が岡山^{（注三六）}から反乱を起した。台湾府を破り総兵の欧陽凱^{（注三七）}、副将の許雲^{（注三八）}はみな戦死した。南北ともに「これに」呼応した。朱一貴は中興王と自称し、年号を「永和」として明朝の制度を回復した。閩浙総督滿保が報告を聞き、馳せて厦門に赴いた。南澳鎮総兵藍廷珍^{（注三九）}

に出兵するように檄し、水師提督の施世驤^{（注四〇）}と合流して台湾を討伐させた。六月、鹿耳門を攻め破り、台湾府に迫った。朱一貴は戦に不利となり捕われた。刑具に掛けられて北京に至り、磔にされ残党もようやく平定された。

八月、強い風が民家を破壊し、空は赤くなった^{（注四一）}。多くの兵士や民が溺死した。徴収すべき年貢を免除し、公金で被災者を賑恤する、と詔勅が下された。その際の朝議で、台鎮総兵を澎湖島に移し、陸路副将を台湾府に設け、水陸両中営を撤廃し内地に帰そうとの議論があつたが、藍廷珍は行うべきではないと力を尽して争い、書をしたためてこの議論を止めさせるように滿保に訴えた。また提督の姚堂^{（注四二）}も彼のために上訴し、朝議はとりやめになった。滿漢の御史から各々一人を特命し、毎年台湾を廻り民の悩み苦しむことを監察させた。

六十一年（一七二二）年夏五月、御史の吳達礼・黃叔

璚^(注四三)が京師より至った。満保は、山沿い一帯で悪

党^(注四四)が隠れやすいため、山の近く十里以内の民を

強制遷移するように命令し、北路から南路まで長城を築き制限しようとした。また塹壕を深く開鑿して永遠

に境界にし、越境した者は盗賊と見做すようにした。

藍廷珍はまた上訴書を出してこれを止めさせた。のちに、石を立て境界と為し、民の立ち入りを禁止するよ

うに、山沿いにある各要害に命じた。この年、阿里山・

水沙連各社の番族はみな、招撫に従った。夏、鳳山の

赤山^(注四五)が爆発し、焰が一丈余りのぼった。

^(注三五) 朱一貴（一六九〇～一七二一）…福建漳州の人。康

熙四八（一七〇九）年台湾に渡る。康熙六十（一七二一）

年に蜂起するも、捕らえられて誅せられた。『重修福建

臺灣府志』巻十九には「朱一貴原名朱祖、岡山養鴨。作

亂後、土人呼爲鴨母王。陷府治……一貴自稱義王、僭號

永和；以道署爲王府。……總督覺羅滿保馳至廈門、檄水

師提督施世驃進兵、南澳總兵藍廷珍統偏師援之。七月復

臺灣、械朱一貴等至京師、磔之」とある。（吳密察監修、

遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、五九頁）。

^(注三六) 岡山…現在の高雄巒岡山区周辺。

^(注三七) 歐陽凱…『重修臺灣府志』巻十に「歐陽凱…漳浦人、功加左都督。康熙五十七年任；六十年殉難」とある。

^(注三八) 許雲…『重修福建臺灣府志』巻十四に「許雲…海澄人。康熙五十七年任。六十年殉難」とある。

^(注三九) 藍廷珍（？～一七二九）…字は荊璞、福建漳浦の人。

軍功により閩浙総督からの推薦を受け、澎湖副將に拔擢、その後も昇進を続ける。朱一貴の乱平定後は台湾総兵に

就き、雍正元（一七二三）年に福建水師提督に昇進。雍

正七（一七三〇）年死去。『重修福建臺灣府志』巻十四

に記事がある。（吳密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰

夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、六十二頁）。

^(注四〇) 施世驃（？～一七二二）…字は文秉、福建省晉江の人。

施琅の第六子。康熙五十一年（一七二二）年福建水師提督

に着任。朱一貴の乱平定後は風雨がもとで発病し、康熙六十（一七二二）年九月死去。（呉密察監修、遠流台灣館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、六十二頁）。

〔注四〕天盡赤…この表現については、『平陽府志』卷三十四に「明世宗嘉靖十二年八月、星隕如雨、光若火、天盡赤」とある。

〔注四〕姚堂…『重修臺灣府志』卷十に「姚堂…山東人、福建籍。康熙五十一年任」とある。

〔注四〕黄叔瓚…字は玉圃、順天大興の人。『續修臺灣縣志』に「（康熙）六十一年、初設臺灣巡察、叔瓚首膺是命。……所著有赤嵌筆談、番俗六考、採摭最富、後之修志書者、率取資焉」とある。

〔注四〕姦宄…悪人、悪党。内部にいる悪人を「奸」、外部からの悪人を「宄」と言う。

〔注四五〕赤山…現在の高雄市鳳山区周辺。

原文

雍正元年、詔曰…「臺灣自古不屬中國、我皇考神武遠屆、拓入版圖。末年朱一貴倡亂、攻陷全臺。諸臣夙稟（秉）方略、士卒感載教養之恩、七日克復。當皇考春秋高邁、威播海外、所有立功將士、其各加等議敘」。於是增設彰化縣及淡防廳、陞澎湖巡檢爲海防同知、添置防兵、以守南北。而臺灣之局勢漸展矣。是年傀儡番亂、討之。

二年、詔蠲康熙十八年至五十年各省舊欠銀米等項。給臺灣換班兵丁家眷口糧。是年、初修諸羅縣誌成。

三年、詔豁番婦丁稅。

四年、初、臺灣之鹽、歸民曬用、但徵其餉；至是改爲官辦、歸府管理。秋七月、水沙連番亂、兵備道吳昌祚會營討之。

五年、詔飭福建將弁慎選臺灣換班兵丁。巡視臺灣御史尹秦奏立社田、以爲番人耕種收獵之所、其餘草地悉行召墾。詔可。其後復有禁佔番地之令。時廷議以臺厦

道職重事繁、著漢御史兼理提督學政。

六年、改臺廈道爲臺灣道。臺灣鎮總兵王郡奏言…換班兵丁、內有字識、舵（舵）工、繚手、斗手等人請就地招募。不許。

七年、詔給臺灣戍守兵丁養贍、每年四萬兩。二月、山猪毛番亂、總兵王郡討之。

八年、詔巡視臺灣御史新舊并用。又令調臺官員到任二年、該督撫另選賢能赴臺協辦、半年之後乃將舊員調回。

九年冬十二月、大甲西社番亂、總兵呂瑞麟討之。

現代語訳

雍正元（一七二三）年、詔勅が下った。「台湾は古から中国に属さず、わが先帝の無上の優れた武徳が遠くまで届き、開拓して国土に編入した。康熙の末年、朱一貴が反乱を起し、台湾全島を攻め落とした。諸大臣は早くから計略を守り、兵卒は教え育てられる恩恵

を戴き感じ、七日で元の平和な状態にもどした。先帝は歳を召されることに当たり、威厳を海外に広く敷き及ぼした。功績を立てたすべての將軍と兵士に昇級を叙することを朝議せよ」。このため、彰化県（注四六）と淡防庁（注四七）を増設し、澎湖巡検を海防同知に昇格した。防衛する兵士を増やし、南北を守らせた。こうして台湾の情勢はだんだんと発展していったのである。この年、傀儡番（注四八）は反乱を起したが、討伐された。

二（一七二四）年、康熙十八年から五十年までの、各省が滞納した年貢などを免除せよ、と詔勅が下された。台湾へ交代する兵士の家族に食糧を給付した。この年、初めて『諸羅縣誌』が編纂された。

三（一七二五）年、番族女性の人頭税を免除せよ、と詔勅が下された。

四（一七二六）年、初め、台湾の塩は民によって（天日にさらして）製造させ、「彼らから」税金を徴収していたが、この年から政府が製造管理することとした。

秋七月、水沙連の番族が反乱を起し、兵備道の呉昌祚

〔注四九〕は軍隊を合わせて討伐した。

五（一七二七）年、福建の武官を戒め、台湾の交代兵士を慎重に選拔せよ、と詔勅が下された。巡視台湾御史の尹秦〔注五〇〕は、社田を定め番族の耕作と獵の場所にして、ほかの草地はすべて開拓民を召集し開墾するべきである、と上奏した。詔が下り「可」とされた。

その後また番地を占有することを禁ずる令が下った。この時の朝議で、台厦道は職務重大であり業務煩雑となるため、漢御史に提督学政を兼ねるように、と命令した。

六（一七二八）年、台厦道を台湾道に改めた。台湾鎮総兵の王郡〔注五一〕は上奏し、交代する兵士のなかで、字識、舵取り、操帆手、斗手〔注五二〕等を現地で募集することを請うたが、許されなかった。

七（一七二九）年、台湾の守備兵士に毎年銀四万テールの生活補助金を給与せよ、と詔勅が下された。二月、

山猪毛の番族が反乱を起し、総兵の王郡はこれを討伐した。

八（一七三〇）年、巡視台湾御史は新旧並用すべきと、詔勅が下された。また台湾に転任した官吏は二年経ってからその総督・巡撫が賢明有能な者を選んで、台湾に赴かせて、ともに業務を協力して処理し、半年後、旧員を呼び戻すべき、と命令した。

九（一七三一）年冬十二月、大甲西社〔注五三〕の番族が反乱を起し、総兵の呂瑞麟〔注五四〕が討伐した。

〔注四六〕 彰化：現在の台中市、彰化県、雲林県周辺。

〔注四七〕 淡防庁：淡水海防庁の略称。

〔注四八〕 傀儡番：傀儡番（ka lei huan）の語は、早くは康熙三十六（一六九五）年、郁永河が来台の際に著した『海紀遊』に見られる。「傀儡番」はルカイ族とパイワン族の拉瓦爾亜族（Raval）、布曹爾亜族（Butsul）の総称である。

〔注四九〕吳昌祚…『重修福建臺灣府志』卷十三に「吳昌祚…

正黃旗人、監生。雍正二年任。六年、陞山東按察司」とある。

〔注五〇〕尹秦…『重修臺灣縣志』卷九に「尹秦、蒙古人、庚午解元。雍正五年任；初奉提督學政、未歲試、以差滿回京」とある。

〔注五一〕王郡…字は建侯、乾州の人。『重修福建臺灣府志』

卷十一に「雍正六年、陞臺灣總兵。……九年、彰化大甲西番林武力聚衆作亂、鳳山流棍吳福生亦乘間爲變。郡時已授水師提督、乃先遣遊擊李榮引兵應援……自辰至未戰數合、賊大潰、各奔竄潛匿；生擒蕭田等八人、梟於營門。越日、福生、大概等三十餘賊悉就擒。南路既平、……於是各社望風皆降、縛獻渠凶林武力等；北路亦平。十餘年來鎮臺者、郡之功爲優云」とある。

〔注五二〕斗手…舵を取る舵工、操帆手である療手。

〔注五三〕大甲西社…現在の台中市大甲区德化里周辺。

〔注五四〕呂瑞麟…『澎湖臺灣紀略』澎湖志略に「呂瑞麟、泉

州府晉江縣人」とある。

原文

十年春三月、鳳山吳福生起事、攻埤頭。守備張玉戰死。原任總兵王郡率軍平之。六月、總督郝玉麟調呂瑞麟回府、檄王郡討大甲西社番、平之。同年、詔蠲彰化縣雍正八年未收正供等項；以凶番初平、稍紓民力也。大學士鄂爾泰奏言…臺灣居民准其挈眷入臺、從之、於是至者日多、皆有闢田廬長子孫之志矣。

十一年、詔免臺灣府屬莊租十分之三。總督郝玉麟奏准臺灣道員准照鎮協之例、三年報滿、知府、同知、通判、知縣即照參將等例、具奏陞補。

十二年、總督郝玉麟奏准調臺官員年逾四十無子者、准其挈眷過臺。

十三年、詔蠲各省正供及官租三分之一、以高宗登極之典也。冬十月、眉加臘番亂、副將靳光瀚、同知趙奇芳討之。十二月、諸羅灣裏街地大震、壞民居；卹銀

三千兩。

現代語訳

十（一七三二）年春三月、鳳山の呉福生は反乱を起し、埤頭^{（注五）}を攻めた。守備の張玉は戦死した。先の総兵の王郡は軍を率いて平定した。六月、総督の郝玉麟^{（注五）}は呂瑞麟を台湾府に呼び戻し、王郡を撤して大甲西社の番族を討伐させ平定した。

同年、彰化県に対して雍正八年に未徴収の正供等の項目の税を免除せよ、と詔勅が下された。これは凶番が初めて平定されたので、民の負担を軽減し労うためである。

大学士の鄂爾泰^{（注五）}は、台湾の居住民は、家族を連れて台湾に入ることを許すべきだ、と上奏して批准された。これによって、渡る者は日に増し、みな田を開拓し小屋を建て子孫を増やす志を有したのである。

十一（一七三三）年、台湾府属の莊租の十分の三を

免除せよ、と詔勅が下された。総督の郝玉麟は、台湾道の官吏は「鎮協の例」に照らして、三年での任期満了、知府・同知・通判・知県は即時に参将等の例に照らし、上奏し昇進や充填すべきである、と上奏して批准された。

十二（一七三四）年、総督の郝玉麟は、台湾に転任し四十歳を過ぎて子供のいない者は、家族を連れて台湾に渡ることを許すべきである、と上奏して批准された。

十三（一七三五）年、各省の正供と官租の三分の一を免除せよ、と詔勅が下された。高宗（乾隆帝）の即位典礼のためである。冬十月、眉加臘^{（注五）}の番族は反乱を起し、副将の靳光瀚^{（注五）}・同知の趙奇芳^{（注六）}がこれを討伐した。十二月、諸羅県湾裡街に大地震が起り、民家を壊した。これにより銀三千テールが賑恤された。

原文

〔注五五〕 埤頭…現在の彰化県埤頭郷周辺。

〔注五六〕 郝玉麟…『清史稿』卷三三九国泰伝附郝碩伝に「郝碩、漢軍鑲黃旗人。父郝玉麟、官兩江總督」とある。

〔注五七〕 鄂爾泰…字は毅庵。号は西林。満洲鑲藍旗人。シリ

ンギョロ（西林覺羅）氏の出身。雲南、貴州、広西の総督に任命され、同地方の先住民苗族の反乱を鎮圧し、自治を改める改土帰流政策を推進。のちに内閣大学士、軍機大臣を務め、乾隆初期の政局を担当した。『西林遺稿』

『文蔚堂詩集』を著した。『清史稿』卷二八八に伝がある。

〔注五八〕 眉加臘…ツォレ族マバアラのこと。現在の仁愛郷北港溪中流周辺に住んでいるものは眉原群と称し、仁愛郷新生村の一部に属する。

〔注五九〕 靳光瀚…『重修臺灣縣志』職官武職に「靳光瀚、潞安人、行伍。……八年陞北路營參將」とある。

〔注六〇〕 趙奇芳…『重修臺灣府志』卷三に「趙奇芳…廣東潮州人、丁未進士」とある。

乾隆元年、詔以臺灣四縣丁銀悉照內地之例、酌中減則、每丁徵銀二錢、著爲例。頒書院規訓。禁內地人民偷渡臺灣。

二年、詔減臺灣番餉、著照民丁之例、每丁徵銀二錢。禁漢番通婚。

三年、詔曰…「臺地如有人民不法等事、嗣後許令武員移送地方官究治。如兵丁生事滋擾、許文員關會營伍責懲。如有彼此推諉者、照例罰俸一年。并飭令各該地方汛防員弁實力奉行、彼此按月稽查、取具并無兵民滋擾印結、轉報該上司查核。如或有意徇縱、即將地方官照狗庇例議處」。二月、始設北路義勝、永勝二寨。秋、臺、諸二縣風災、詔蠲丁糧。

現代語訳

乾隆元（一七三六）年、台湾の四つの県の丁銀はすべて内地の例に照らしてその中から減則を斟酌し、成

年男子一人当たり銀二銭を徴収することを例とせよ、と詔勅が下された。書院規則が頒布された。内地の人民は台湾に秘密裏に渡航することを禁じた。

二（一七三七）年、台湾の番餉（先住民の租税）を減らせ、と詔勅が下された。民丁の例に照らし一人当りに銀二銭を徴収することを例とせよ、と詔勅が下された。漢族と番族の通婚を禁じた。

三（一七三八）年、詔勅が下った。「台湾において、人民は不法等のことがある場合、事後武官に命じて地方の官吏に移送し（罪を）追求し裁くことを許可する。兵士がことを生じ騷擾になる場合、文官が軍隊に到達して責任を追及させ、懲罰させよ。互いに責任転嫁したり罪を他人になすりつけ、押し被せることがある場合、例に照らして年俸分の罰金を供出させよ。また各該当地方の汛防將校に命令を順守させるように戒める。互いに月並に査察させ、「并無兵民滋擾」の証明書を作成し、該当する上司に転報して審査させよ。仮

に意図的に筋を曲げ見逃せば、直ちに地方官吏に、「狗庇例」に照らして処分を論議させよ」。二月、初めて北路に義勝・永勝の二寨を設けた。秋、台湾・諸羅二県に風災があつたため、丁糧を免除せよ、と詔勅が下された。

原文

四年、定臺灣舉人會試取中之例、從御史諸穆布之奏也。建校士院。禁漢人侵墾番地。

五年、禁臺灣居民挈眷入臺。初、換班兵丁例由臺、諸兩縣官莊支發路費、至是改由福建。閏六月、大風雨、四日始息、鹽水港災尤烈。發帑二百兩以賑。

六年、巡臺御史書山、張湄（眉）奏建府倉、備荒歉；從之。

七年、詔曰…「臺灣地隔重洋、一方孤寄、寔爲數省藩籬、最爲緊要、雖素稱產米之區、邇來生齒倍繁、土不加闢、偶因雨澤愆期、米價即使昂貴。蓋緣撥運四府

及各營餉之外、内地採買既多、并商船所帶、每年不下四、五十萬；又南北各港來臺小船、巧借失風名色、私

裝米穀、透越内地。彼處概給失風船照、奸民恃爲護符、運載遂無底止。且游手之徒、乘機偷渡來臺、莫可究詰。

聞此項人等、俱從廈門所轄之曾厝垵、白石頭、大擔、南山邊、劉武店及金門之料羅、金龍尾、安海、東石等處小口下船。一經放洋、不由鹿耳門入口、任風所之。

但得片土、即將人口登岸、其船遠棹而去。愚民多受其害。況臺灣惟藉鹿耳門爲門戶、稽查出入、今任游匪潛行往來、海道便熟、將鹿耳門亦難恃其險要、殊非慎重海疆之意。朕所聞如此、著該督撫嚴飭所屬文武官弁、將以上各弊一一留心清查、并於汛口防範周密、不使疏縱。庶民番不至缺食、港路亦可肅清。該部可傳諭知之。

現代語訳

四（一七三九）年、台湾の挙人会試における、合格者の定員の例を定めた。御史の諾穆布（注六二）の上奏が

批准されたためである。校士院を建てた。漢人が番地へ侵入して開墾することが禁じられた。

五（一七四〇）年、台湾居住民が、家族を連れて渡台することが禁じられた。初め、交代する兵士に台湾・諸羅両県の官荘から交通費が支給されたが、以後、福建からの支給に変更された。閏六月、大風雨が發生し、四日経つてやっと終息した。塩水港（注六二）の被害は最も激しかったため、公費の銀二百テールが給付され救済に充てられた。

六（一七四一）年、巡台御史の書山（注六三）と張湄（注六四）が、府倉を建てて凶年のために糧食を備えるべきである、と上奏して批准された。

七（一七四二）年、詔勅が下された。「台湾という地は八方を海に隔たれ遠方に孤立しているが、その実は数省の護りとなり、非常な要所となっている。もとより『産米の区』と称されているが、近年人口が増加し、土地の開墾は進んでいない。たまの時季外れの早

魃によって米価がすぐ高騰する。恐らくその原因は、四つの府および各軍隊の給料として配付されるほか、大陸からの買い付けも多く、並びに商船の搭載は毎年四、五十万石を下らない点にあるだろう。また、南北各港から台湾に来る小型船舶も、巧みに台風に遭ったなどの名目を借りて、密かに米穀を搭載して内陸に密輸していた。彼らはいたい、台風に遭った証明が与えられ、悪人がそれを頼りにしていたため、その結果、底抜けに運搬は行われてしまった。また、瘋癲の輩が機に乗じて台湾へ不法に渡来することも追及できなくなる。この類の人間は、すべて厦門の所轄する曾厝垵・白石頭・大担・南山辺・劉武店および金門の料羅・金龍尾・安海・東石などの小さな港口から船を出していると聞く。(彼らは)いったん外洋に出ると鹿耳門から上陸せず、風の行くところに任せて、小さな陸地に着くとすぐに人を岸に下し、その船は遠くへ去って行く。(不法渡航を目論んだ)愚かな民は、多くその害

を受けている。ましてや台湾はただ鹿耳門だけを門戸と為して、出入りの検査している。今、流賊の潜行往來に任せて、海道的手段に慣れさせれば、きつと鹿耳門もまたその要害に頼りにくくなる。これではまったく海域を慎重にする意にならないと、朕は聞いている。該当の総督、巡撫は所属の文武官吏に厳しく命令し、以上の様々な弊害を逐一精査させ、並びに駐屯、巡回する地域において周密に防犯し、放任させないようにせよ。民と番族の食物が欠乏に至らず、航路もまた取り締まることができるように、望むものである。該当する部署には諭を伝え、知らせよ」。

(注六) 諾穆布…号は宜亭、滿洲正藍旗人。康熙五十六(一七一一)年の挙人。乾隆二(一七三七)年、台灣監察御史、乾隆五(一七四〇)年三月、本土へ帰る途中死去。台灣仕紳の施士安等によって「諾公穆布甘棠遺愛碑記」がたてられた。台南大南門碑林内に現存。『重修福建臺

『灣府志』卷十三職官に記事がある。

(注六二) 塩水港…塩水は現在の台南市塩水区。かつて八掌溪にあった河港。

(注六三) 書山…『續修臺灣縣志』に「滿洲鑲黃旗人、刑科給事中」とある。

(注六四) 張湄…字は鷺洲、号は南漪、一名柳漁、浙江錢塘の人。雍正十一（一七三三）年の進士。乾隆六年（一七四一）巡臺御史に着任し、提督学政を兼ねる。在台中の取材をもとに『瀛壖百詠』を著す。（許雪姬他編『臺灣歴史辭典』、遠流出版事業股份有限公司、二〇〇四、七三二頁）。

原文

八年、定淡水商船之數。

九年、詔禁武員建置官莊。改臺灣田園之稅。

十年秋八月、澎湖風災、詔發內帑六百兩以賑。九月、詔曰…「閩省丙寅年地丁錢糧已全行蠲免。惟是臺灣府屬一廳四縣地畝額糧、向不編徵銀兩、歷係徵收粟穀。

今內地各郡既通行蠲免、而臺屬地畝因其編徵本色、不得一體邀免、非朕普遍加恩之意。著將臺灣府屬一廳四縣丙寅年額徵供粟一十六萬餘石、全數蠲免」。

十一年、詔准臺灣人民挈眷入臺。

十二年、詔以臺灣丁銀配入錢糧完納。

十三年。

十四年秋七月、大雨水、臺灣縣屬田園多陷。

十五年秋七月、大雨水。八月、大風、碎船壞屋。知

府方邦基溺於南日。移淡水八里坌巡檢於新莊

十六年。

十七年、定臺灣監察御史巡視之例。以臺灣道兼理提督學政。夏六月、地震。秋七月、大風挾火而行、草木

盡焦。文廟檣星門圯。

十八年、詔免臺、鳳、彰三縣十五年被水田賦。秋八

月、大風損禾。

十九年夏四月、淡水地大震、毛少翁社陷爲水。九月、諸羅大風損禾、詔緩徵粟、發倉賑濟。

現代語訳

八（一七四三）年、淡水の商船の数が定められた。

九（一七四四）年、武員が官荘を建てることを禁じる、と詔勅が下された。台湾の田園の税を改めた。

十（一七四五）年秋八月、澎湖島で風災があり、銀六百テールを下賜し賑恤すると詔勅が下された。九月に、「福建省の丙寅（一七四六年）の地丁錢糧はすべて免除したが、ただ台湾府所轄の一厅四県の土地の税額は、今まで銀の徴収をせずに昔から米穀を徴収した。今、内地各郡はすでに免除が行われているが、台湾の土地は本色（実物納入）によるため、一律免除されることができないことは、朕の普遍的に加恩する本意に沿わなくなる。従って台湾府所轄の、一厅四県の丙寅年の税額十六万石をすべて免除せよ」と詔勅が下された。

十一（一七四六）年、台湾人民が家族を連れて台湾に渡航することを批准する、と詔勅が下された。

十二（一七四七）年、台湾の人頭税を土地税に併合して納入せよ、と詔勅が下された。

十三（一七四八）年。

十四（一七四九）年秋七月、大雨が降り、台湾県所轄の田園の多くは陥没した。

十五（一七五〇）年秋七月、大雨が降った。八月、強い風が船を碎き家を壊した。知府の方邦基^{（注六五）}は南日島^{（注六六）}で溺死した。淡水八里坌^{（注六七）}の巡検を新莊^{（注六八）}に移した。

十六（一七五一）年。

十七（一七五二）年、台湾監察御史巡視の規則を定めて、台湾道が提督学政を兼ねた。夏六月、地震が起きた。秋七月、強風が火を辺りに広め、草木のすべてを焦がし、文廟の櫺星門は倒壊した。

十八（一七五三）年、台湾・鳳山・彰化三県の乾隆十五年に水没した田の田賦を免除する、と詔勅が下された。秋八月、強い風が稲穂を損ねた。

十九（一七五四）年夏四月、淡水に大地震が起き、毛少翁社^{（注六九）}は水没した。九月、諸羅で強風が稲穂を損ねたため、年貢の徴収を緩めよ、と詔勅が下された。倉庫を開き被災者に賑恤した。

〔注六五〕 方邦基…『續修臺灣縣志』に「方邦基、字樂只、號

松亭、杭州仁和人」とある。

〔注六六〕 南日島…現在の福建省莆田市秀嶼区東南に位置する島。

〔注六七〕 八里坌…現在の新北市八里区周辺。

〔注六八〕 新莊…現在の新北市新莊区周辺。

〔注六九〕 毛少翁社…現在の台北市士林、社子、天母周辺。

原文

二十年、詔免諸羅縣十五年被水田賦。

二十一年。

二十二年冬十二月、澎湖大風、哨船多沒。

二十三年、詔廢通事、社丁之例。禁私墾。冬十月、諸羅大風雨三日、晚稻多損、詔緩徵粟。

二十四年、移淡水都司於艋舺。建玉峯、白沙兩書院。臺灣縣知縣夏瑚以內地人民客死臺灣、未得歸葬、倡捐義款、代運其柩至厦、以交親屬；時人稱爲善政。

二十五年、詔許臺灣居民攜眷同住。

二十六年、移新港巡檢於斗六。

二十七年、詔免淡水廳二十四年劃出界外園賦。

二十八年、建明志書院。

二十九年、詔禁福建人士入臺冒籍考試、從御史李宜青之奏也。

現代語訳

二十（一七五五）年、諸羅県の乾隆十五年の水没した田の田賦を免除せよ、と詔勅が下された。

二十一（一七五六）年。

二十二（一七五七）年冬十二月、澎湖島に強風が起

き、監視船の多くが沈没した。

二十三（一七五八）年、通事・社丁の規則を廃せよ、と詔勅が下された。不法に開墾することを禁じた。冬十月、諸羅県は三日にわたる暴風雨によって、晚稻の多くが損害を受けたため、年貢の徴収を緩めよ、と詔勅が下された。

二十四（一七五九）年、淡水都司（注七〇）を艋舺（注七二）に移した。玉峰・白沙両書院を建てた。台湾県知県の夏瑚（注七二）は以下のように提唱した。「内地の人民は台湾で客死して故郷に帰葬できない。そのため義捐金を募り、代わりにその柩を廈門に運び、親族に引き渡そう」と。当時の人はこれを善政と称した。

二十五（一七六〇）年、台湾人民が家族を連れて台湾で同居することを許可せよ、と詔勅が下された。

二十六（一七六一）年、新港（注七三）の巡検を斗六（注七四）に移した。

二十七（一七六二）年、淡水庁の乾隆二十四年の「劃

出界外」の園賦を免除せよ、と詔勅が下された。

二十八（一七六三）年、明志書院を建てた。

二十九（一七六四）年、福建省の出身者が台湾に入り、本籍を偽り受験することを禁じる、と詔勅が下された。これは御史李宜青（注七五）の上奏に従ったものである。

（注七〇）淡水都司…北路淡水營のこと。

（注七一）艋舺…現在の台北市万華区。

（注七二）夏瑚…『續修臺灣縣志』卷二に「夏瑚、浙江仁和人」とある。

（注七三）新港…現在の嘉義県新港郷周辺。

（注七四）斗六…現在の雲林県斗六市。

（注七五）李宜青…号は荊川、江西寧都州の人。乾隆二十八年（一七六三）年、巡視台湾監察御史として台湾に至る。『續修臺灣縣志』卷二巡察御史に記事がある。

原文

三十年秋九月、大風碎船。

三十一年、始設鹿港同知、以理民番交涉事務。秋八月、大風碎船。

三十二年。

三十三年、漳人吳漢生入墾蛤仔難。

三十四年。

三十五年春正月十三日、府治枋橋頭火、雨水沃之不熄。十五夜、真武廟前又火、燬屋百餘。九月、臺灣黃教起事、平之。

三十六年、詔蠲臺灣府屬額徵供粟一十六萬餘石。

三十七年秋七月、大水。彗星見。

三十八年。

三十九年。

四十年。

四十一年冬十一月、地大震、諸羅尤烈、壞屋殺人。

四十二年。

四十三年、詔免臺、鳳二縣被水田賦。

四十四年。

四十五年、詔蠲臺灣府屬額徵供粟。

四十六年。

現代語訳

三十（一七六五）年秋九月、強風が船を砕いた。

三十一（一七六六）年、初めて鹿港^{（注七六）}同知を設け、民と番族の交渉事務を管理した。秋八月、強い風が船を砕いた。

三十二（一七六七）年。

三十三（一七六八）年、漳州の人である吳漢生がカ

balan^{（注七七）}に入り、開墾した。

三十四（一七六九）年。

三十五（一七七〇）年春正月十三日、台湾府下の枋橋頭^{（注七八）}に火事が起き、雨水に降られても消えなかった。十五日の夜、真武廟の前にもまた火事が起き、家

屋百棟余りを焼いた。九月、台湾黄教^{〔注七九〕}が反乱を起こし、平定された。

三十六（一七七二）年。台湾府属の「額徴供粟」十六万石余りを免除する、と詔勅が下された。

三十七（一七七二）年秋七月、洪水が起きた。彗星が現れた。

三十八（一七七三）年。

三十九（一七七四）年。

四十（一七七五）年。

四十一（一七七六）年冬十一月、大地震が起きた。

諸羅県の被害がもつとも酷かった。家屋が壊され人も犠牲となった。

四十二（一七七七）年。

四十三（一七七八）年、台湾県・鳳山県は水害をこうむつたため、田賦を免除せよ、と詔勅が下された。

四十四（一七七九）年。

四十五（一七八〇）年、台湾府属の額徴供粟を免除

せよ、と詔勅が下された。

四十六（一七八一）年。

〔注七六〕 鹿港…現在の彰化県鹿港鎮周辺。

〔注七七〕 カバラン…現在の宜蘭県周辺のこと。クヴァラン族が多く住んでいた地域なので蛤仔難と呼ばれた。なお、カバランの漢字表記は複数あるため、本訳註では「カバラン」で統一した。

〔注七八〕 枋橋頭…現在の台南市公園路、民權路、民族路周辺。

〔注七九〕 黄教…福建同安の人。山地に通曉し、数々の略奪を重ねるが、最後は裏切った仲間の手引きによつて殺された。（呉密察監修、远流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、八十頁）。

原文

四十七年。淡水、彰化漳泉籍民分類械鬥。巡撫雅德奏聞。詔曰…「此等匪徒聚衆械鬥、案情重大。該鎮道

一經聞信、即應帶領兵役、親赴該處、嚴行查辦。乃僅派委副將、知府前往、而雅德亦無飭行之語、殊屬非是。該鎮金蟾桂、該道穆和蘭一併交部、嚴加議處」。

四十八年。初、漳、泉州械鬥、至是抄封亂首之業。

四十九年、詔開鹿港通商。秋八月、大風雨、壞屋碎船。

五十年。

五十一年、定武弁更代之例。冬十一月、彰化林爽文起事、破邑治、知府孫景燧、理番同知長庚、攝縣事劉亨基、都司王宗武等死之。遂陷諸羅、略淡水。鳳山莊大田亦起應、府治戒嚴。

五十二年春正月、福建陸路提督黃仕簡、水師提督任承恩以師至臺、觀望不進。十月、詔以協辦大學士福康安領侍衛內大臣海蘭察、率滿漢弁兵赴臺、遂復彰化、俘爽文、大田、南北俱平。

五十三年、詔頒屯丁之制。春二月、淡水大雨雪、飢、斗米千錢。

五十四年。

五十五年、詔蠲臺灣供粟、照內地之例、三年勻免。

設新莊縣丞。夏六月、大風雨挾火以行、滿天盡赤、毀屋碎船；澎湖尤烈。

五十六年秋八月、波蘭人麥禮荷斯奇至臺東、謀闢地。

五十七年、詔開八里坌通商。夏六月、郡治地震。翼日、嘉義大震、繼之以火、死者百數十人。

五十八年。

五十九年。

六十年春三月、彰化陳周全起事、北路同知朱慧昌、鹿港營游擊曾紹龍、副將張無咎、署知縣朱瀾等均死。總兵哈當阿以兵平之。七月、淡水大水。

現代語訳

四十七（一七八二）年、淡水・彰化・漳州・泉州の籍民が分類械闘を起こした。巡撫の雅徳が上奏し、以下の詔勅が下された。「これらの匪徒は民衆を集め械

闘（武装闘争）を行い、情状が重大である。該当の鎮・道は報せを聞いたら、即時兵役を引率し自らその場所へ赴き、厳しく査察対処すべきである。しかるに、ただ副将・知府を派遣し赴かせるだけで、雅徳もまた『謹んでことに当たれ』との言もない。これはまことに誤りである。該当する鎮守の金蟾桂・道台の穆和蘭は併せて刑部に交付し、厳しく議論した上で処罰せよ』。

四十八（一七八三）年の初め、漳州・泉州の籍民が分類械闘を起こした。ここに至り、乱を起した首謀者の財産を没収することにした。

四十九（一七八四）年、鹿港における通商を開始せよとの詔勅が下された。秋八月、大風雨に見舞われ、家屋が壊され船舶が碎かれた。

五十（一七八五）年。

五十一（一七八六）年、武弁更代の例を定めた。冬十一月、彰化^{（注八〇）}の林爽文^{（注八一）}が反乱を起こし、邑治を破り、知府の孫景燧^{（注八二）}・理番同知の長庚・捫臬事

の劉亨基^{（注八三）}・都司の王宗武等は殺された。（林爽文は）諸羅を落し、淡水を攻略した。鳳山の莊大田も立ち上がって呼応し、府治は厳戒態勢が敷かれた。

五十二（一七八七）年春正月、福建陸路提督の黃仕簡・水師提督の任承恩^{（注八四）}は、軍隊を率いて台湾に至ったが、偵察だけで兵を進めなかった。十月、協弁大学士の福康安^{（注八五）}と侍衛内大臣の海蘭察^{（注八六）}が満漢の弁兵を率いて台湾に赴くように、と詔勅が下された。そして彰化を恢復して、林爽文・莊大田を捕え、南北ともに平定された。

五十三（一七八八）年、屯丁の制を公布するとの詔勅が下された。春二月、淡水に大雪が降り飢饉が発生し、米価は一斗あたり千錢となった。

五十四（一七八九）年。

五十五（一七九〇）年、台湾府の供粟を内地の例に倣い、三年間すべて免除せよとの詔勅が下された。新莊に臬丞を設けた。夏六月、大風雨が起こり、その風

が火を辺りに広め、空はすべて赤くなり、家屋や船舶は破壊され澎湖島はもつとも酷かった。

五十六（一七九一）年秋八月、ポーランド人のモリス・ベリオスキー（Maurice Berowski）が台東へ至り、開拓をしようとした。

五十七（一七九二）年、八里坌を開き通商せよと、詔勅が下された。夏六月、台南に地震が起きた。翌日嘉義にも大地震が起きた。続いて火災が発生し死者は百数十人であった。

五十八（一七九三）年。

五十九（一七九四）年。

六十（一七九五）年春三月、彰化の陳周全（注八六）が反乱を起こした。北路同知の朱慧昌（注八七）・鹿港営游撃の曾紹龍・副将の張無咎・署知県の朱瀾（注八八）などが死んだ。総兵の哈当阿（注八九）は兵を以て平定した。七月、淡水に洪水が発生した。

（注八〇）林爽文…福建省漳州平和の人。『清史稿』卷十五高

宗本紀乾隆五十一年と五十二年の条に、事件が語られている。

また、『臺灣通史』卷三十一に伝がある。（呉密察監修、

遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、

二〇〇七、八十四頁）。

（注八一）孫景燧…字は秋汀、浙江の人。『福建通志臺灣府』

職官に記事がある。『臺灣通史』卷三十一に伝がある。

（注八二）劉亨基…字は少圃、湖南湘潭の人。『福建通志臺灣府』

職官に記事がある。

（注八三）任承恩…山西大同の人。『晉江縣志』卷十八武功や

卷二十九職官志に記事がある。

（注八四）福康安…字は瑤林、富察氏、満洲鑲黄旗人。『清史稿』

卷三百三十に伝がある。（呉密察監修、遠流台湾館編著、

横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、

八十五頁）

（注八五）海蘭察…多拉爾氏、満洲鑲黄旗人。『清史稿』卷

三百三十一に伝がある。

〔注八六〕陳周全…一名、陳周。民衆叛乱の指導者。一七九二年、福建同安で叛乱を起こすが失敗、残党と共に台湾に逃れてきた。同年、陳周全は陳光愛など天地会の構成員と共に鳳山県署を攻撃するも失敗し、鳳山に逃れて彰化に身を隠した。『臺灣通史』卷三十一に伝がある。

〔注八七〕朱慧昌…浙江の人。『彰化縣志』卷三官秩志に記事がある。

〔注八八〕朱瀾…浙江仁和の人。『彰化縣志』卷三官秩志に記事がある。

〔注八九〕哈当阿…蒙古正黄旗人。『續修臺灣縣志』卷四郡志に記事がある。

原文

嘉慶元年秋、大風雨、晚稻多損。詔曰…「臺灣地臨海洋、颶風常有。此次風勢猛烈、致損禾稻、刮倒房屋、壓斃人口、殊堪憫惻。哈當阿等務當查明成災分數、應

行蠲緩之處、據寔奏明辦理。其坍塌民房、照例給與修費。總期使得其所、不可靳費。所有應需賑卹銀兩、即於藩庫內撥解、以資接濟。至臺灣全藉晚收以資口食、今猝被颶風、糧價未免增長。此或由朕政事有闕或愚民等平日不能共敦淳厚、感召祥和、致有此災。此時斷不可稍存怨尤之念、惟當省過學淳。且風災過後、勤於耕種、來春仍可稔收、尤當及時力作、不可稍有怠惰。再、福、興、漳、泉四府夙藉臺米接濟、今臺灣既被風災、目下僅堪自給。明歲春收後、或米穀充盈、可以運售內地、固屬甚善；倘無餘米可運、當於各屬豐收之處、豫爲籌備。并勸令百姓等樽節衣食、家有儲蓄、不可再將米穀釀酒花費、致鮮蓄藏。豫爲明歲之備、有無相通、隨時運販、以期民食有資、方爲妥善」。於是撥解藩庫二十萬兩分卹、并留應運內地兵穀三萬四千餘石以備賑糴。漳人吳沙入墾哈仔難、至者日多。

嘉慶元（一七九六）年秋、暴風雨に見舞われて晩稲の多くが損なわれた。そこで詔勅が下された。「台湾の地は海洋に面し、常に台風がある。今回、風の勢いが猛烈であつたため稲は損なわれた。風は家屋を倒し人々を押しつぶした。特に憐れいたむに値する。哈当阿などは被害の程度を調べて明らかにせよ。減免・猶予すべきところは事実可依拠して上奏し処理せよ。倒壊した家屋は例に照らして修理の費用を給付するように。すべてその費用は必要な箇所適切に利用され、惜しまないことを期待する。需要に応じてすべての賑恤費用は布政司の倉庫から分配し、人々の救済に充てよ。台湾については晩稲を収穫して食糧に資しているが、今、突然台風に見舞われたため、米価の高騰は免れないであろう。これは、おもうに朕の政事に不足があるか、あるいは愚民などが常々互いに人情の厚さを大事にせず、幸福を享受しなかったため、災いに至っ

たのであろう。この際、断じて恨み辛みの思いを少しも抱かないようにして、ただ過ちを反省して優しさを学ぶべきである。なおかつ風の災害が過ぎた後、農作業に勤しめば来たる春にはまた実りを収めることができよう。特に時機に適つて耕作に尽力し、少しも怠けるようなことがあつてはならぬ。また、福州・興化・漳州・泉州四府は以前台湾の米で救済されたことがあり、今台湾は風災を被り、目下僅かに自給に堪えている。来春の収穫の後、ことによつては米穀が溢れ、内地に運送して売りさばくことができれば、いうまでもなく善いことであらう。もし余剰の米が出なくても、各々の豊作地域はこれを納め、あらかじめ備蓄を為すべきである。並びに民などに衣食を節約させ、各家庭に貯蓄を勧め、米穀を酒に醸造したり、無駄遣いをしたりして貯蓄を少なくすることをやめさせるように勸告せよ。あらかじめ来年に備えを為し、（米の）有無を相通じて、随時運送し販売することができれば、民

の食糧に資することが期待でき、これこそまさに最善の方法である」。これによって、布政司の倉庫から二十万テールを支出させ賑恤した。また、内地に運ぶべく兵糧三万四千石余りを留めて、それを売りさばいて賑恤に備えた。漳州の人である呉沙はカバランに入り、開墾した。来る者は日ごとに多くなった。

原文

二年、淡水楊兆謀起事、知府遇昌、同知李明心誅之。
三年。

四年、詔蠲乾隆六十年以前未納正供。

五年冬十月、詔禁天地會及分類械鬥。

六年。

七年春、小刀會白啟謀起事、誅之。

八年夏六月、海寇蔡牽犯鹿耳門、詔以福建水師提督

李長庚平之。自是疊犯臺灣。

九年、彰化社番土目潘賢文率族至蛤仔難、與漢人爭

地。

十年夏四月、蔡牽復犯淡水。十一月、入踞鹿耳門、山賊吳淮泗、洪老四應之。十二月、陷鳳山、府治戒嚴。

現代語訳

二年（一七九七）年、淡水の楊兆謀が反乱を起こした。知府の遇昌・同知の李明心^{（注九）}は楊を誅殺した。

三（一七九八）年。

四（一七九九）年、乾隆六十年まで未納の正供を免除せよ、と詔勅が下された。

五（一八〇〇）年冬十月、天地会と分類械闘を禁止するとの詔勅が下された。

六（一八〇一）年。

七（一八〇二）年春、小刀会の白啓が反乱を謀ったが、誅殺された。

八（一八〇三）年夏六月、海賊の蔡牽^{（注九）}は鹿耳門を犯したため、福建水師提督の李長庚に平定せよ、

と詔勅した。これ以降（蔡牽は）重ねて台湾を犯すようになった。

九（一八〇四）年、彰化熟番土目の潘賢文（注九二）は一族を率いてカバランに至り漢人と開拓地を争った。十（一八〇五）年夏四月、蔡牽はまた淡水を犯し、十一月、鹿耳門を占拠した。山賊の呉淮泗・洪老四はこれに応じた。十二月、鳳山を陥落させ、府治は警戒を厳しくした。

（注九〇） 李明心…字は孔昭、号は鏡涵、貴州普安の人。『福建通志臺灣府』職官台防同知に記事がある。

（注九一） 蔡牽（一七六一―一八〇九）…一名、蔡鯤。福建同安の人。台湾海峡において海賊行為を行った。滬尾（現在の淡水）において政權を樹立し、年号を光明、「鎮海威武王」と号した。嘉慶十四年、清軍に包囲され、自殺した（呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、八十七頁）。

（注九二） 潘賢文…一名、大乳汗毛格。彰化のパゼツへ族（Pazul）岸裡社番の頭目。カバランの開拓などを行ったが、争いを起こしたため、嘉慶十五（一八一〇）年、処刑された。（許雪姬他編『臺灣歴史辭典』、遠流出版事業股份有限公司、二〇〇四、一二二頁）。

原文

十一年春二月、淡水漳泉械鬥、巡道慶保平之。蔡牽攻蛤仔難、敗走、已而朱潰亦犯蘇澳、海上俶擾。至十四年八月乃平。詔曰…「臺灣所屬各地方、茲因蔡牽肆逆、間被滋擾。現在官兵雲集、即日殲除。惟念賊氛所至、小民耕種未免失時、深爲厪念。著該督撫查明被賊蹂躪地方、將本年應徵地丁錢糧、概行蠲免。以示朕軫念海隅黎庶之至意」。

十二年、淡水增建義倉。

十三年、設水師游擊於艋舺、兼管水陸弁兵。
十四年夏五月、詔曰…「噶瑪蘭田土膏腴、米價較賤、

民番流寓日多。若不官爲經理、必致滋生事端。現在檢査戶口、漳人四萬二千五百餘丁、泉人二百五十餘丁、粵人一百四十餘丁、又有生熟各番雜處其中。該處居民大半漳人、以強凌弱、勢所不免。必須有所鈐制、方可相安無事。其未墾荒埔、查明地界、某處令某籍民人開墾、某處令某社番耕作、尤須分劃公平、以杜爭端。至所設官職、應視其地方之廣狹、酌量議添。或建爲一邑、或設爲分防廳鎮、俱無不可。唯臺灣寫處海外、諸務廢弛。今方維甸到彼、於地方營伍、力加整頓、酌改章程、若地方官謹守奉行、自可漸有起色。第恐日久生懈、且該處俱係漳、泉民人雜處、素性強悍、總領時有大員前往巡閱、使知敬畏。嗣後福建總督、將軍、每隔三年、輪赴臺灣巡查一次、用資彈壓」。是月、淡水漳、粵與泉分類械鬥、知府楊廷理平之。

現代語訳

十一（一八〇六）年春二月、淡水で漳州人と泉州人

の分類械闘が起きた。巡道の慶保^{（注九三）}が平定した。蔡牽はカバランを攻めたが、敗走した。その後、朱潰^{（注九四）}も蘇澳^{（注九五）}を犯した。海上は甚だしく騷擾に陥ったが、嘉慶十四年八月によく平定された。詔勅が下された。「台湾に所属する各地方で、蔡牽が勝手気ままに反逆を起し、隙を探って騷擾したが、現在官兵が集まったため即日消滅した。ただ賊の影響を受けたところの住民は耕作時機を失われかねないため、深く気にしている。該当する総督・巡撫に賊に蹂躪される地域を調査させ、本年徴収すべき地丁銀をすべて免除せよ。これによって朕の海浜の民を労る心を示す。

十二（一八〇七）年、淡水に義倉を増設した。

十三（一八〇八）年、艋舺に水師游撃を設けて、水陸の弁兵の管理を兼ねさせた。

十四（一八〇九）年夏五月、詔勅が下された。「カバランの土壌は肥沃で米価は比較的に安いため、流寓の民も先住民も増えている。もし、官署が経営管理を

為さなければ必ず事が起きよう。現在戸口を査察すると、漳州籍の男子は四万二千五百余名、泉州籍の男子は二百五十余名、広東籍の男子は一百四十余名ある。またその中で生番・熟番が雑居している。当地の居住民の大半は漳州籍であるため、強さを以て弱小を虐げる情勢は免れないところがある。必ず厳しく管理してこそ相無事になる。また開墾されていない荒地に対して、境界線を明らかに査定の上、ある場所はある籍民に開墾させ、ある場所はある社番に開墾させることを、特に公平に画定してこそ争いの発端を防ぐことができる。官職を設けるところに至っては、その地方の広さを見て、酌量してその増加を議論すべきである。あるいは一邑を建てるか、あるいは分防庁鎮を設けるか、どちらも選択できる。ただ、台湾は遠い海外にあり、諸々の政務は荒廃し緩んでいる。今、方維甸^(注九六)は現地に着任し、地方に軍隊を置き、力を入れて整頓している。政令の改編を斟酌したため、もし地方の官吏

はそれを謹守し奉行すれば、自ら徐々によくなるはずだが、ただ、日がたつにつれて弛んでいくだけが気懸かりである。なおかつその土地は漳州と泉州の民が雑居し、(彼らは)素性が勇猛であるため、常に上官が巡視する必要がある。これは敬怖の威を感じさせるためである。今後、弾圧に資するため、福建総督・將軍は三年に一度、順繰りで台湾に赴くようにせよ」と。この月、淡水で漳州・広東の籍民が泉州籍民と分類械闘を起こし、知府の楊廷理^(注九七)が平定した。

^(注九三) 慶保…字は佑之、号は蕉園、滿洲鑲黃旗人。『福建通志・臺灣府』職官総督に記事がある。

^(注九四) 朱漬…福建漳州の人。「海南王」を称し、蔡牽の勢力とともに海賊行為を行っていた。嘉慶十三年金門で砲撃を受け、死亡した。残った勢力は弟の朱渥が引き継いだ。のちに清に投降した。(許雪姬他編『臺灣歴史辭典』、遠流出版事業股份有限公司、二〇〇四、二九九頁)。

〔注九五〕 蘇澳…現在の宜蘭県蘇澳鎮周辺。

〔注九六〕 方維甸（一七五九～一八一五）…字は南耦、号は葆岩、安徽桐城の人。乾隆四十六（一七八二）年の進士。嘉慶十四（一八〇九）年閩浙総督に就く。嘉慶二十（一八一五）年死去し、太子少保と勤襄の諡をおくられた。『清史稿』卷三百五十七に伝がある。

〔注九七〕 楊廷理…字は清和、号は雙梧、広西柳州の人。朝廷に、カバランを版図に入れることを度々上奏し、噶瑪蘭庁の設立に寄与した。『東瀛紀事』などの著作がある。『臺灣通史』卷三十一に伝がある。

原文

十五年春三月、總督方維甸至臺灣。四月、奏請收入噶瑪蘭、許之。越二年乃設噶瑪蘭廳。

十六年。初、臺灣歲運福建兵眷米穀、至是積滯。總督汪志伊奏請僱船自運。夏六月、淡水高變起事、平之。十八夜、鳳山東港海中發火、既而大風、火從小琉球嶼

來、居民惶恐、熱氣蒸人、數刻乃退、木葉盡焦。

十七年春二月、澎湖飢、詔命鎮道發帑賑卹。

十八年、詔禁阿片煙入口、犯者按律治罪。秋七月、澎湖大風、海水驟漲五尺餘、壞屋覆船。

十九年春正月、詔曰「閩省牌甲保長、所有緝拏人犯、催徵錢糧、此後毋庸再派管理。至稽查戶口、即當予以糾察之權。三年之後、果有成效、加以獎賞。其怠玩者、隨時革究。而畬民熟番、久與齊民無異。自當一律辦理」。

現代語訳

十五（一八一〇）年春三月、閩浙総督の方維甸が台湾に至った。四月、カバランを版図に編入することを上奏して、許可された。二年後、カバラン庁を設けた。

十六（一八一二）年の初め、毎年台湾から福建に運ぶ兵糧と兵士の家族の米穀は、ここに至って滞っていた。閩浙総督の汪志伊〔注九八〕は船を雇い自ら運ぶことを上奏した。夏六月、淡水で高變が反乱を起こしたが、

平定された。十八日の夜、鳳山の東港に海中から火が立ち、間もなく強い風が起きた。火は小琉球嶼^(注九九)から延びてきて、住民は恐懼した。熱気は人を蒸し、数刻の後、退いたが、木の葉は焦がれ尽された。

十七（一八一二）年春二月、澎湖島に飢饉が発生した。鎮道などの官庁に公費を配り、被災民を救済するように詔勅が下された。

十八（一八一三）年、アヘンの輸入を禁止するとの詔勅が下された。違反する者は法律によって刑を定めた。秋七月、澎湖島に強い風が発生した。海面は突如五尺余り漲って家屋を壊し、船を転覆させた。

十九（一八一四）年春正月、詔勅が下された。「福建省の保甲制度の長は、すべて犯人を拿捕することと、徴税を催促することなどを、今後再びその管轄の権限を分ける必要はない。戸口の査察に至っては、即、糾察の権限を与える。三年後、成果があつたら、褒美を加えよう。怠つたり不真面目になつたりする者は、随

時免職して罪を追及する。また、畚族（福建、広東、江西に分布している少数民族）の人々も熟番も、長い間庶民と相違なくなっているため、一視同仁に対処すべきである」。

^(注九八) 汪志伊（一七四三—一八一八）…字は稼門、安徽桐城の人。『清史稿』卷三百五十七に伝がある。

^(注九九) 小琉球嶼…現在の屏東県琉球郷。

原文

二十年秋九月、地大震；淡水尤烈、匝月不止。十二月、淡水雨雪、堅冰寸餘。

二十一年、移鹿港巡檢於大甲。

二十二年、淡水始建學宮。移彰化訓導於竹塹。八月、澎湖大風。

二十三年、彰化知縣楊桂森議罷臺運、省議不可。三月、郡治天后宮火。

二十四年。

二十五年、海寇盧天賜犯滬尾、游擊李天華逐之、受傷死。夏、淡水大旱。秋、疫。

現代語訳

二十（一八一五）年秋九月、大地震があった。淡水はもっとも激しかった。一箇月間止まなかった。十二月、淡水は降雪し、固い氷が一寸余り張った。

二十一（一八一六）年、鹿港巡檢を大甲に移した。

二十二（一八一七）年、淡水で初めて学宮を建てた。

彰化訓導を竹塹に移した。八月、澎湖島に大風があった。

二十三（一八一八）年、彰化知県の楊桂森（注一〇〇）は、「台運（注一〇一）をやめるべきだと提案したが、省議は不可とした。三月、郡治（台南）の天后宮は火災に遭った。

二十四（一八一九）年。

二十五（一八二〇）年、海賊の盧天賜が滬尾（現淡水）を犯した。游擊の李天華は駆逐した際、負傷して死亡した。夏、淡水に大旱魃が起きた。秋、疫病が蔓延した。

（注一〇〇）楊桂森…字は蓉初、雲南石屏州の人。もとの名は楊汝達。『福建通志臺灣府』職官彰化県知県に記事がある。

（注一〇一）台運…乾隆六（一七四一）年から始まった、台湾に赴任しているものが、家族などに（台湾の）米を送ることができる制度。『臺灣通史』糧運志「清人得臺、分駐戍兵皆調自福建、三年一換、乃賦其穀曰正供、以備福建兵糈。凡商船赴臺貿易者、須領照、準其樑頭、配載米穀、謂之臺運、其事由廈門海防同知司之。」（許雪姬他編『臺灣歷史辭典』、遠流出版事業股份有限公司、二〇〇四、一〇六六頁）。

原文

道光元年夏四月、海寇林烏興犯滬尾、逐之。

二年夏六月、大風雨。七月、又大雨、曾文溪決、泥積臺江、遂成平陸。

三年春正月、地大震。七月、噶瑪蘭匠首林泳春謀亂、水師提督許松平之。八月、彗星見於東南、而氣沖西北、越年春乃滅。九月、北路理番同知鄧傳安入埔里(裡)社、議開設。十一月、詔曰：「臺灣噶瑪蘭自嘉慶十六年奏

准開闢後、委員勘丈、共田園七千五十甲零。原議每田一甲徵租六石、每園一甲徵租四石、經戶部議駁、行令查照叛產成案、分別徵收、迄今額徵科則尚未議定。十七年後、陸續起徵之租、俱未入冊報銷。茲據該督等查明、前次委員係用繩牽丈、核算戶口約計、寔在開墾五千七百餘甲。內原墾田地尚屬有收、續墾田園率皆磽薄、且甫經開墾、尚須農民自費工本。兼之土沙浮鬆、溪水泛溢、寔係限於地勢、不能分則定賦。至官地荒田由民墾墾、亦與叛產不同。此時不特租額不能議加、即

畝分倘有缺短。如照部議增租、民力寔有難支。著照該督所請、噶瑪蘭田園截至本年爲止、除水沖沙壓不計外、再行確寔覆勘、墾熟田園寔有若干？按地土之肥瘠、定租額之多寡。該督等即飭該道府督同委員、會同該廳履畝勘丈、取造冊結報陞。其歷年租穀、即造冊報部核銷、毋許絲毫隱匿。如所墾田地將來漸就豐腴、即隨時加議租額、以昭核寔」。

現代語訳

道光元（一八二一）年夏四月、海賊の林烏興が滬尾を犯し、驅逐された。

二（一八二二）年夏六月、暴風雨が起きた。七月、また大雨が降った。曾文溪（注一〇二）の堤防は決壊し、泥が台江（注一〇三）を塞ぎ遂に平野となった。

三（一八二三）年春正月、大地震が起きた。七月、カバランの匠首（木材伐採職人のリーダー）林泳春は反乱を謀ったが、水師提督の許松が平定した。八月、

東南の空に彗星が現れて、その気は西北に衝き、翌年の春にようやく見えなくなつた。九月、北路理番同知の鄧伝安は埔里社に入り、その地を開拓し官署を設けようと建議した。十一月、詔勅が下された。「台湾のカバランは、嘉慶十六年、上奏を批准して開闢以後、官員を委任し土地を丈量した結果、田園は合計七千五十甲余りあつた。元来、田一甲あたりに租六石、畑一甲あたりに租四石を徴収せよ、という奏議だったが、戸部は反対した。そのため反乱者から没収した地産を査定し、（田園を）分別して徴収せよ、と命令を下し結論が定まつた。しかし、現在までその税額（註一〇四）はまだ定まつていない。嘉慶十七年以後、次々と徴収し始めた年貢は、いずれも登録し決算を行わなかつた。該当する総督（方維甸か）の査察によれば、前回委任された官員は、縄をもつて丈量し、戸口との合算で実際は、五千七百甲余りを開墾したことが分かつた。そのうち、かつて開墾した田地はまだ収穫が

あるが、継続して開墾した田園はすべて不毛の地に属している。なおかつ開墾したばかりで農民は自ら原価を費やさなければならず、兼ねて土地はすかすかとなり、河川もよく氾濫し、實際土地の状況に制限され、段階を分けて田賦を定めることはできない。官有する荒田を民に開墾させても、また反乱者から没収した土地とは（生産力が）異なる。現在、租額を上げようにも奏議ができず、畝分として徴収すべき量すらも不足がある。（そのために）戸部の奏議に照らし田賦を増加してしまうと、民の力では実に支払い難いであろう。現在、該当する総督の上申に照らして、本年までのカバランの田園は、洪水に流され土砂に覆われたものを除き、再び確実な再調査をするべきである。開墾された田園は実際いくらあるか、その土地の肥瘦により租額の多少を決めるように、該当の総督は所轄の道府へ命令し、委任した官員を督して、カバラン庁（の責任者）田畝を踏査・丈量し、記録を取り、田賦の額を

報告せよ。歷年の租穀は、すみやかに記録し戸部に報告の上、決算せよ。少しの隠匿も許すべきではない。仮に将来その開墾した田地がようやく肥沃になれば、すぐに随時租額の増加を奏議し、査察の結果を明確にすべきである」。

(注二〇二) 曾文溪…現在の嘉義県阿里山を水源とし、台南市を横断して海にそそぐ河川。現在、上流には曾文水庫(ダム)があり、台湾で四番目の総延長をほこる。

(注二〇三) 台江…今の台湾本島西南沿海に位置し、台南市の沿海にまたがる周辺のこと。

(注二〇四) 税額…原文は「額徴科則」額徴は、徴税するべき地租を指す。『清會典・戸部・免科田地』「又議准…山東曹縣、利津、壽光三縣……額徴糧銀一千八百七十兩零漕米一百二十餘石、一體照額豁除」。科則は、政府が土地を等級付けし、徴税の基準を定めること。また、税収の基準的な額を指す。

原文

四年夏五月、福建巡撫孫爾準至臺灣、議開埔裡(里)社。十月、命臺灣道兼管水陸營兵。十一月、詔改臺灣班兵更戍之例、以艋舺營游擊爲參將。

五年秋七月、詔曰…「臺灣向係漳、泉、粵三籍人民分莊居住。上年匪徒許尚等糾衆滋事、即有遊民從中煽誘。茲據趙愼畛等奏請清莊之法。著照所請。嗣後臺灣地方、如有面生可疑、無親屬相依者、該莊頭人立即稟報地方官、審明籍貫、照例逐令過水刺字、遞回原籍安插、毋許復令偷渡。其投充水夫者、亦令夫頭查明、果係誠寔安分、具結准充；如來歷不明、及好勇鬥狠之徒、俱報明本管官、一律逐回原籍。并飭漳、泉府廳縣、如遇遞解遊民到境、即責鄉耆等嚴行管束」。

現代語訳

四(一八二四)年夏五月、福建巡撫の孫爾準(注一〇五)は台湾に至り、埔里社を開墾しようと建議した。

十月、台湾道に水陸營兵を兼ねて管轄せよと命令した。十一月、台湾を守備する兵士の交代についての法令を改めて、艋舺營遊撃を參將とせよ、との詔勅が下された。

五（一八二五）年秋七月、詔勅が下された。「台湾において、かつてから漳州・泉州と広東三つの籍民は集落を分けて居住することとなっている。昨年、匪徒の許尚らは民衆を糾合し反乱を起こす際、遊民はその中に入って扇動していた。趙慎畛（注一〇六）らは「清莊の法」を上奏したが、その奏議を批准する。今後、台湾地方において、見た目が怪しく頼る親族がいない者があれば、該当村落の長はすぐ地方の官吏に稟告せよ。そしてその本籍を審査の上、例に照らして入れ墨をし、海に向かうの本籍に送り、入籍させ、再び不法渡航をさせないようにせよ。その中の、水夫に充てる者も、また水夫の長に査察を命じ、果たして誠実で身の程をわきまえている者ならば、始末書を備えた上、それに

充てることは許そう。来歴不明な者、凶悪で喧嘩好きな者の場合は、いずれも管轄の官員に報告し、すべて本籍に追い戻せ。並びに漳州・泉州の官署に命令し、護送される遊民が管轄境内に至ったら、その土地の年長者に責任を取ってもらい、厳しく管理せよ」。

（注一〇五）孫爾準（一七七二～一八三二）…字は平叔、江蘇金匱の人、嘉慶十年（一八〇五年）進士に合格。嘉慶二十四年（一八一九年）任江西按察使に次いで福建布政使に就く。道光三年（一八二三年）福建巡撫に就き、道光五年（一八二五年）閩浙総督に進み、彰化の反乱を平定した。道光十一年（一八三一年）病のため辞職し、翌年死去した。『奉天録』、『泰雲堂集』、『福建通志』などの著作がある。『清史稿』卷三百八十に伝がある。

（注一〇六）趙慎畛（？～一八二六）…字は笛樓、武陵の人。嘉慶元年（一七九六）進士に合格。道光二（一八二二）年閩浙総督に就く。翌年雲貴総督に就くも、まもなく死去。

『清史稿』卷三百七十九に伝がある。

原文

六年夏五月、淡水閩、粵分類械鬥。山賊黃斗奶導生番掠中港。總督孫爾準至臺灣、以兵平之。十二月、詔曰…「臺灣所屬係閩、粵兩籍居住。閩、粵、漳、泉各分氣類、每因械鬥滋事。此次懲創之後、該督議立章程、以期永靖、著照所請。嗣後該地方官慎選總董、責成約束子弟。如積久著有成效、量予獎勵。倘縱容滋事、即應嚴辦。遇有不法匪徒潛匿、責令總董傳送究治、務期鋤暴安良。至於風俗之淳澆、尤視廳縣之能否。其貪黷嚴酷者、固難姑容；而因循姑息者、亦難資整頓。該督即率同司道、秉公訪察、將疲軟不振之員、即行澄汰。如該管道府有意徇庇、據寔參劾」。冬、築淡水城。

七年、裁鎮標左右兩營。

八年、陳集成公司始墾大料坎之地。

九年。

現代語訳

六（一八二六）年夏五月、淡水に閩・粵の分類械闘が起きた。山賊の黄斗奶は生番を導き、中港に侵攻した。閩浙総督の孫爾準は台湾に至り、兵を以て平定した。十二月、詔勅が下された。「台湾には福建・広東両籍の民が所属しており、それぞれが居住している。福建・広東・漳州・泉州それぞれ意気投合した者が分かれて械闘をし、乱事を起こす。このたび、反乱を懲らしめた後、総督が法令を立てて永遠に安定を期することを奏議した。その上申に照らして批准する。今後、該当する地方官吏は、慎重に総理董事（地元の管理者）を選び子弟らに約束することを責任とする。久しくして明らかに効果があれば、奨励を与えることを考慮しよう。仮に放任して乱事を起こした場合は、直ちに厳しく処分すべきである。不法な匪徒が潜伏しそれを隠匿することがあれば、総理董事に咎めさせるために〔官吏を〕送れ。これで暴漢を排除し良民を安じさせるこ

とを期待する。風俗の良し悪しに関しては、それぞれ庁県管理能力に関わるものである。汚職の酷い者はもとより姑息であり容赦できないが、古い習慣ややり方にとらわれて改めようとせず、その場しのぎに終始する者もまた、整頓に資することができない。該当する総督は即ちに司道を引率して、公平に査察し、疲弊不振の者を即ちに淘汰せよ。仮に該当する道府が意図的に庇う場合は、上奏する事実によって弾劾せよ」と。

七（一八二七）年、鎮標左右兩營を撤廃した。

八（一八二八）年、陳集成公司が大嵯坂（注一〇七）の地を開墾し始めた。

九（一八二九）年。

（注一〇七）大嵯坂…現在の桃園市大溪区。

原文

十年、詔禁各省種賣阿片、從閩浙總督孫爾準之奏也。

犯者照興販阿片煙之例、發近邊充軍。爲從、杖一百、徒三年。秋八月、噶瑪蘭挑夫械鬥、平之。

十一年、淡水同知婁雲頒保甲莊規。

十二年、詔緩澎湖雜項。秋八月、大風雨、近海田廬多沒。閏九月、嘉義張丙起事、鳳山亦亂。十一月、福建陸路提督馬濟勝以兵平之。

現代語訳

十（一八三〇）年、各省に対し、アヘンを植えることと売買することを禁止せよ、という詔勅が下された。これは閩浙総督孫爾準の奏議によるものである。違反する者は、アヘン販売の例に照らし、近辺（二五〇〇里）の充軍（注一〇八）刑に処する。（販売を）補助する者は、杖百と徒刑三年に処する。秋八月、カバランの荷担ぎ人夫は械闘し、平定された。

十一（一八三一）年、淡水同知の婁雲（注一〇九）は、保甲の莊規（規定）を頒布した。

十二（一八三二）年、澎湖島の雜項（注二〇）の徵収

を猶予せよとの詔勅が下された。秋八月、大風雨が發生し、近海の田・小屋（家屋か）が多く水没した。閏九月、嘉義の張丙が反乱を起こした。鳳山にもまた反乱が起きたが、十一月、福建陸路提督の馬濟勝は兵を以て平定した。

（注二〇）充軍…罪人を辺境に送って兵役・労役につかせる。

流罪にすること。充軍執行地の距離（里）。極辺、烟瘴（四〇〇〇）、辺遠（三〇〇〇）、辺衛（二五〇〇、清は近辺となる）、沿海附近（一〇〇〇、清は附近となる）。

（注二〇）婁雲…字は秋槎、浙江山陰の人。『福建通志臺灣府』職官淡水同知に記事がある。

（注二〇）雜項…租税。清の初め、田園やため池に応じて銀や米などの課税のほかに、雜項として、酒や塩などに税を課した。

原文

十三年秋七月、詔曰…「朕勤卹民隱、惟日孜孜。總其成於上、而分其任於督撫。爲大吏者果能體朕之心爲心、以民之事爲事、正己率屬、賢者知所勸、不肖者知所懲、吏治自日臻上理。上年臺灣逆匪張丙等滋事、其始因搶米起釁、經吳質牽控張丙。該縣不辨包米、轉出賞格查拏張丙。其陳辨因搶牛起釁、攻打粵莊、事本細微、若得一良有司秉公辦理、自可息爭。乃邵用之不協輿情、呂志恆果於自用、遂致戕官攻城、竟同負隅之勢。及訊明該逆因何造反、咸稱地方官辦事不公。雖係一面之詞、如果循聲卓著、該逆等何能藉口？總兵劉廷斌訓練不動、營伍廢弛；該道平慶雖操守尚好、而不能防患未然、咎無可追、俱交部嚴加議處。總督爲特簡大員、文武俱歸統轄、若使孫爾準其身尚在、朕必加以徵處、不少寬貸。姑念該逆等尚未僭據城邑、邵用之等亦無貪婪劣跡、從寬免議。嗣後督撫大吏、必須以察吏安民爲當務之急。遇有不肖官吏、破除情面、立即參劾、勿稍

瞻徇。若再因循疲玩、釀成大患、勞師動衆、誤國殃民、朕必從重治罪、毋謂訓誡之不早也」。八月、淡水漳泉械鬥、平之。

十四年、築後壠城、爲械鬥也。

十五年、詔鑄十年以前未納正供。

十六年。

十七年、詔禁紋銀出洋。建文甲書院。

十八年。

現代語訳

十三（一八三三）年秋七月、詔勅が下された。「朕は、日々こつこつと民の苦痛を憐れむことに励んでいる。その成果を上からまとめ、その責任を総督や巡撫に分担させている。もし、上級官吏が朕の心を体得しそれを自分の心とし、民の事を自分の職務として、おのれを正し部下を率いれば、賢者は勧告されるところを知り、愚か者は戒められることを知り、官吏の統治は日々

上達するだろう。昨年、台湾の逆賊張丙らが乱事を起こした（注一二）のは、初め、米の強奪から衝突が発生したが、その後、呉贊（注二三）が張丙を牽制した。しかし、該当の嘉義県は包米を分別せず、かえって賞金をかけ、張丙を逮捕するように指名手配した。また陳弁は牛を強奪することから衝突を起こして、広東籍民の村を攻撃した。

もともとその発端は些細なことだった。もし、ひとり有能な役人がいて公平に処理したのならば、自然に治まるはずである。しかし、（嘉義知県の）邵用之は輿論に協調せず、（台湾知府の）呂志恒（注二三）は他人の意見を聞き入れず、かつてに振る舞ったため、そこで官吏が殺され、城が攻略されることとなり、（盗賊は）天険によって頑強に手向かう勢力となってしまう。その後、該当の逆賊に造反した理由を尋問したところ、明らかにしたのは、すべて地方官吏の事の処置が不公平であったためだということだ。これは一方的な言

い訳だが、もしも官吏に善良公平の評価があり、明らかな作爲があれば、該当の逆賊はそれを言い訳にするだろうか。

総兵の劉廷斌は兵士の訓練にはげまず、軍隊の綱紀が退廃した。該当の兵備道の平慶は節操品格が良いとしても、（反乱を）未然に防げなかったため、咎めないわけにはいかない。ともに刑部に交付し厳格に処分を議論すべきである。総督は特命した上級官僚のため、文武官吏はすべてその統轄に属す。仮に孫爾準がまだ存命しているならば、朕は必ず処罰を下し、少しもゆるめないであろう。その逆賊らはまだ城を占拠していないことに免じて、また邵用之は貪欲や汚職などの悪い記録もなかったため、寛大にして処罰を議論することをやめさせよう。

今後、総督・巡撫などの上級官僚は、下級官吏を査察し民を安んじること至急の任務とすべきである。愚鈍な官吏があれば、情けや面子を無視して、少しも

私情で手加減することなく、直ちに上奏し弾劾せよ。もし、再び旧態依然のままにして大きな患いに醸成させ、軍隊を疲れさせ民衆を動員させ、国や民に禍をもたらしたら、朕は必ず重い罪をたて処分する。その際、訓戒をもっと早めに言うべきだ、というようなことは言わせない」。八月、淡水で漳州・泉州の械闘があり、平定された。

十四（一八三四）年、後壘^{（注一四）}の城を築いた。械闘にそなえるためである。

十五（一八三五）年、道光十年まで未納の正供を免除する、と詔勅が下された。

十六（一八三六）年。

十七（一八三七）年、紋銀を海外輸出することを禁じる、と詔勅が下された。文甲書院を建てた。

十八（一八三八）年。

原文

〔注二〕 乱事を起こした…張丙事件。道光十二年十月、張丙によって起こされた反乱事件。張丙は嘉義の人であり、当時の「英雄豪傑」と交流があった。ある事件から指名手配されることになった張丙は、追捕に來た役人を殺害し、これを契機に、嘉義県内で暴動略奪を繰り返した。しかし、福建水師提督馬濟勝によって十二月末までに平定された。『臺灣通史』卷三十二に伝がある。（呉密察監修、遠流台灣館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、九十二～九十三頁）。

〔注三〕 呉質…呉賛の誤りか。『臺灣通史』卷三十二に記載がある。

〔注四〕 呂志恒…字は立吾、江蘇陽湖の人。『清史稿』卷四百八十九に伝がある。

〔注五〕 後輩…現在の苗栗県後龍鎮周辺。

十九年、詔曰…「朕因阿片煙流毒、傳染日深、已成錮習、若不及早爲民除害、伊於胡底。現在廷臣遵旨會議嚴禁章程、已頒發各直省遵行矣。該官民人等咸懷王章、遷善改過、自不難湔洗舊習、革除前非、共享全生之樂、藉免刑戮之加。即各地方官亦必懷遵新例、認真查辦。悔過者予以自新、怙惡者不令倖免。但積習相沿、已非一日、若數月之間、遽使各省一律肅清、恐不免有諱飾等弊。故予限一年六個月、俾查拏不致遺漏、而改悔亦不甚難。及至限滿、仍復貌法、是該軍民等自外生成、無可顧惜。置之重典、尚復何詞？此朕愛民之心、先德後威、中外所共睹也。惟官民人等皆朕赤子、旣欲衛其生而除害、不能不視其死而垂憐。況法立如山、再三申諭。將來限滿後、再犯者難邀寬典、朕甚憫焉。著各直省大吏、趁此儆動之機、振刷精神、認真查辦。務使販吃各犯、悉數破案、照例懲創。此時限內多獲一人、則將來限外多貸一命、切勿因循懈怠、視爲具文。倘該

地方官等姑息養奸、鋤莠不盡、日後身罹重典、乞貸無從。是該大吏以民命爲輕、朕亦斷不寬恕也。懍之！」
時姚瑩任台灣道、遵旨嚴辦、犯者刑、再犯死。

現代語訳

十九（一八三九）年、詔勅が下された。「朕がおも
うに、アヘン流行の毒害がながく広まって悪習となっ
ている。早急に民のために害を除去せねば、どれほど
悪化してしまうだろうか。現在、大臣らは聖旨に従い、
議決したアヘン嚴禁の章程をすでに直隸と各省に頒布
し遵守してもらっている。該当する官民らはすべて王
朝の法律を敬い、過ちを善に改めるべきである。さす
れば、旧習を洗い落し、今までの非行を改めることは
難しくないだろう。共に身体を全うして楽しむことが
でき、刑罰に処されることは免れよう。ただちに各地
方官吏は必ず謹んで新例を遵守し、査察処分を真剣に
努めよ。改心者を自新更生させ、悪事を続けて改めよ

うとしない者は幸いにも免れさせない。

ただし、そのまま踏襲された風習は一日にして蓄積
してきたものではない。仮に数箇月の間、各省は急遽
すべて肅清しても、故意に隠べいしたり装飾美化した
りするなどの弊害は免れないだろう。ゆえに一年六箇
月の期限を与え、査察拿捕の遺漏がないようにすれば、
また改心することもさほど難しくないだろう。満期に
至り、依然として法律を軽視するようであれば、これ
は該当する軍民らが自ら疎外するようなもので、
処罰を惜しむものではない。重い法律に裁かれてもま
た何の弁解の言葉が出るだろうか。これは朕が民を愛
する心であり、始めに恩徳を施し、威力を用いらない
ことは国内外共に見ているところである。

ただ、官民らはみな朕の赤子であり、その生活を守
り害を除去されることを望むため、その死を見て憐れ
まずにすることはできない。ましてや法律は山のごと
くそびえ、また再三に諭告したため、将来期限満了後、

再犯する者は寛大な対処を求め難いのはなおさらである。朕は甚だしくあわれみ気の毒に思う。ただちに直

隸と各省の上級官僚に、この差し迫った不安定な機会に乗じて、精神を刷新し、査察の職務に勤しむように命じる。アヘンを販売・吸飲を犯した者は悉く摘発し、

例に照らし会わせて罪を反省し心を入れ替えさせよ注

二五。期限内で一人でも多く拿捕できたら、将来期限が過ぎた後の一命を救うことになろう。くれぐれも旧

態依然のままにして、法律を空文にし実施すべき行為を行わずに放置しないように。仮に該当する地方官吏

が悪人・悪事を大目に見て助長し、不良をすべて除去しなければ、後日、重い刑罰を蒙ることになり、寛大

(な裁き)を乞うこともできない。これは該当する上級官僚が民の命を軽んじることになり、朕もまた断じて寛恕しない。謹んでこれを受け止めよ。

この時に姚瑩注二六は台湾道に赴任し、聖旨に従い厳しく処理した。違反する者は刑罰を、再犯した者

は死罪に処した。

注二五 哀矜懲創…罰は罪を反省して心を入れ替えるため

のものであり、罰を与える者は相手を思いやる情け、悲しみ、哀れみの心を持つことが大切であるという戒め。

注二六 姚瑩…字は石甫、一名明叔、号は展和、安徽桐城の人。『清史稿』卷三百八十四に伝がある。

原文

二十年。冬十月、地大震、嘉義山崩。

二十一年秋七月、英艦窺雞籠。自是游弋沿海。總兵

達洪阿、兵備道姚瑩共籌戰守、輒却之。十二月、詔曰…

「前據達洪阿等奏、英人滋擾臺郡、官兵擊沉船隻、奪獲器械、并擒斬洋匪多名。當有諭旨令該總兵等嚴飭在

事文武、添派兵勇、嚴密防範。并諭令王得祿移駐臺灣、協同勦辦。嗣因日久未據續報、復諭令怡良等確探馳奏。

迄今又將匝月、朕心寔深屢念。臺灣爲閩海要區、向爲

英人垂涎之地；此次駛入船隻、復經該總兵等殲勦、難保無匪船闖入、冀圖報復。現據奕山等奏、英人有遣人回國添調兵船於明春滋擾臺灣之語、該總兵等接奉前旨後、於一切堵勦機宜、自宜先事預籌妥洽。現在情形若何？有無續來滋擾？萬一英人大隊復來、該處駐守弁兵及招募義勇、是否足資抵禦？其如何定謀決策、層層布置、可操必勝之權、著達洪阿會同王得祿悉心定議、一并會銜具奏。并著怡良等密速確探現在情形、據寔奏聞」。給事中朱成烈奏開臺灣番地、於是議墾埔里社。

二十二年春二月、英船復犯大安港、却之。三月、草烏匪艇犯塹南各港。夏、淡水大有年。

二十三年、全臺正供改徵折色。自歸清後、至是漢、番凡二百五十萬人。

二十四年夏四月、臺灣縣以徵折色故、保西里人譁變、詔逮知縣閻忻治罪。

二十五年、詔蠲未完正供。

二十六年冬、淡水大有年。

二十七年夏四月、福建總督劉韻珂至臺灣、巡視埔里社、奏請收入版圖。廷議不許。臺灣縣鍾阿三、鄒薏狗、洪紀等以次謀亂、誅之。

二十八年、徐宗幹任巡道、整吏治、議募兵、振士風、理屯務、多所更作。

二十九年。

三十年夏六月、淡水大水、澎湖災、官民辦賑。下旨嘉獎。

現代語訳

二十（一八四〇）年冬十月、大地震が起きた。嘉義で山が崩れた。

二十一（一八四一）年秋七月、英国の軍艦が鷄籠（注二七）を窺って、これより沿海部を巡回するようになった。総兵の達洪阿（注二八）兵備道の姚瑩とともに戦って防衛することをはかり、すぐに退却させた。

十二月、詔勅が下された。「以前、達洪阿らの上奏

によつて、イギリス人が台湾を騷擾したが、官兵はその船舶を撃沈し、武器を獲得した。また洋匪を多数捕虜にして斬殺した。当然、該当総兵らに諭旨を与え、担当の文武官吏に厳しく命令した。また、兵士を増派して手落ちなく防御させた。そこで王得祿^(注一九)を台湾に移駐させ、外敵の殲滅に協力させた。その後、日が経ち、久しく続報に接していなかったため、再び怡良^(注二〇)らに確實に調査させ速やかに上奏するように命じた。また今まで一箇月が経とうとしており、朕は心に深く懸念している。

台湾は福建海域の重要な地域であり、かねてからイギリス人の垂涎の地となつている。このたび、船舶で進入したため、また該当する総兵らに殲滅させたが、匪賊の船舶は報復をはかつて不意に侵入しないとは保証できない。

現在、奕山らの上奏によれば、イギリス人が人を派遣して国に戻つて兵船を調達し、来年の春にまた台湾

を騷擾するのではないかという。したがつて、該当する総兵らは前の聖旨に接してから、防衛撲滅すべての機宜において、現在の状況はどうなのか、継続して騷擾に來ることの有無など、自らあらかじめ事を妥当に計画せよ。万が一、イギリス人の大軍が再び來たら、該当の地に駐屯している弁兵及び召募した義勇兵は、抵抗防御に資するに足りるか否か、謀略を定め計策を決めて、それぞれの階級に設置して、いかに必勝の立場を得ることができるか、達洪阿は王得祿に会合し全力を尽くして議論を定め、また連名で詳細に上奏するように。並びに怡良らは現在の状況を密かにして速やかに探查し、事実によつて上奏せよ」と。給事中の朱成烈は台湾の未開の地を開墾すべきだと上奏し、これによつて埔里社の開墾を議論するようになった。

二十二(一八四二)年春二月、イギリスの船はまた大安港^(注二二)を侵犯したが、退却させた。三月、草烏の匪賊の船舶が竹塹(新竹)以南の各港を侵犯した。

夏、淡水は豊作であった。

二十三（一八四三）年、台湾全域の正供を折色の徴収に変えた。台湾は清朝に帰して以来、番人の人口はおよそ二百五十万人に達した。

二十四（一八四四）年夏四月、台湾県は折色を徴収しようとしたが、保西里（注二二）の住民は反乱を起こした。詔勅によって知県の閻忻（注二三）が逮捕され罪を問われた。

二十五（一八四五）年、未納の正供を免除すると、詔勅が下された。

二十六（一八四六）年冬、淡水は豊作であった。

二十七（一八四七）年夏四月、福建総督の劉韻珂（注二四）は台湾に至り、埔里社を巡視し、そこを版図に収めるべきだと上奏したが、朝廷の議論で許可されなかった。台湾県の鍾阿三・鄒意狗・洪紀らは反乱を謀ったため、誅された。

二十八（一八四八）年、徐宗幹（注二五）は巡道に任

命された。官吏の統治を整え、募兵を議論し、士大夫の気風を高め、屯兵の事務を整理して、改革を多く行つた。

二十九（一八四九）年。

三十（一八五〇）年夏六月、淡水に洪水があり、澎湖にも災害が起きた。官民ともに救済を行ったため、褒美の聖旨が下された。

（注二七）鶏籠：現在の基隆周辺。『福建通志』卷六十三 台湾府諸羅県の条に「鶏籠城在鶏籠嶼」とあり、淡水城と鶏籠とともにオランダ人が建築したと述べる。

（注二八）達洪阿：字は厚庵、満洲鑲黄旗人。（呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、九十五頁）。

（注二九）王得禄：字は百適、号は玉峰、嘉義の人。『清史稿』卷三百五十に伝がある。

（注三〇）怡良：字は悦亭、姓は瓜爾佳、満洲正紅旗人。欽

差大臣や閩浙総督を歴任した。『清史稿』卷三百七十一に伝がある。

〔注二二〕 大安港…現在の台中市大安区周辺の港。

〔注二三〕 保西里…現在の台南市归仁区北部。

〔注二四〕 閩圻…河南新鄭県の人。『臺灣通志』職官噶瑪蘭通判に記事がある。

〔注二五〕 劉韻珂…字は玉坡、号は荷樵、一名廉訪、山東汶上の人。『清史稿』卷三百七十一に伝がある。

〔注二六〕 徐宗幹…字は樹人。江蘇省通州の人。『清史稿』卷四百二十六に伝がある。

原文

咸豐元年春三月、澎湖大災、鎮道會商撫卹、撥款五千兩以賑、詔命福建督撫分別辦理、應徵地種船網等稅、緩至二年秋後帶徵、以紓民力。十月、復詔曰「本年臺灣澎湖廳屬被風、業經降旨、分別緩徵撫卹、小民諒可不致失所。惟念來春青黃不接之時、民力未免拮据、

著傳諭該督撫等體察情形、如有應行接濟之處、即查明據寔覆奏、務於封印前奏到、候朕於新正降旨加恩」。西洋輪船始來滬尾、雞籠互市、照例納稅。

二年夏六月、澎湖大風、臺灣鄉試之船溺於草嶼。

三年夏四月、鳳山林恭起事、陷縣治、圍城府。已而噶瑪蘭吳磻亦起事。次第平之。五月、大屯山鳴三晝夜。六月、大風雨。淡水漳、泉分類械鬥。鑄咸豐錢。

四年春正月、淡水閩、粵分類械鬥。四月、海寇黃位（威）入據雞籠、平之。美國水師提督彼理來游。

五年、械鬥未息。枋橋、房裏各築城。十二月、淡水雨、雹。

六年。

七年春正月、淡水大雪。

八年、黃位又犯雞籠。英人始訂約採腦。

九年。

十年、開滬尾、雞籠、安平、旗後爲商埠、從八年英法之約也。普國兵船愛爾比至琅璫、爲生番所阻、開砲

撃之。八月、澎湖大風、下鹹雨、壞屋覆船。

十一年、設全臺釐金局、歸兵備道管理。

現代語訳

咸豐元（一八五二）年春三月、澎湖島で大きな風災が起きた。鎮・道が合同してのことを議論した。銀五千テールが支給されて被災者を救済した。福建総督・巡撫はそれぞれの権限で処理し、また徴収すべき地・種・船・網租などの租税は、二年後の秋にまとめて徴収するために猶予^{（注二六）}し、民の財力を発展させよ、と詔勅が下された。

十月、ふたたび詔勅を下した。「本年、台湾の澎湖庁管下は風災に遭ったため、すでに聖旨を下し、租税徴収の猶予をもって賑恤した。民は身の置きどころをなくし当てもなくさまようまでではなくなるだろう。ただし、来春、端境期になって食糧が不足した際^{（注二七）}、民の懷具合が寒くなることは免れないだろうと

思い、該当する総督・巡撫らに、身をもって状況を査察するように諭告した。仮に、救援すべきところがあれば、ただちに明白に査察し事実に基づいて上奏せよ。必ず封印（年末の仕事納め）する前に上奏し、新春に朕が聖旨を下し恩恵を加えることを待つがよい」。

西洋の輪船ははじめて滬尾（淡水）に來た。鶏籠は貿易港となり、例に照らして納税させた。

二（一八五二）年夏六月、澎湖島で大きな風災が起きた。台湾（から福建へ）の郷試の船が草嶼付近で沈没した。

三（一八五三）年夏四月、鳳山の林恭が反乱を起こして、県府を陥れ、府城を包囲した。間もなくカバランの呉瑤も反乱を起こしたが、ついで平定された。五月、大屯山が三昼夜鳴き続けた。六月、大風雨が降った。淡水で漳州・泉州の籍民が分類械闘をした。咸豐錢を鑄造した。

四（一八五四）年春正月、淡水で福建・広東の籍民

が分類械闘をした。四月、海賊の黄位が鶏籠に入り占拠したが、平定された。米国の水師提督ペリーが来游した(注二八)。

五(一八五五)年、前年の械闘が続いた。枋橋・房裏でそれぞれ城を築いた。十二月、淡水で雨や雹が降った。

六(一八五六)年。

七(一八五七)年春正月、淡水で大雪が降った。

八(一八五八)年、黄位はまた鶏籠を犯した。イギリス人は条約を結び樟脳の採取を始めた。

九(一八五九)年。

十(一八六〇)年、滬尾(淡水)・鶏籠・安平・旗後(高雄)を商業港として開放した。これは咸豊八年の英仏(天津)条約に従うためである。プロイセン王国の兵船・エルベ(ELBE)号が(注二九)琅璫(恒春)に至ったが、生番に阻まれたため、発砲し(生番を)撃った。八月、澎湖島で大きな風災が起き、塩辛い雨が降つ

た。家屋が壊れ船が転覆した。

十一(一八六一)年、全台釐(厘)金局(注三〇)を設けて兵備道の管理に帰した。

(注二六) 帯徴：明清の代において、租税を取るとき、新たに名目を立てて徴収すること、数年間溜まった未納の分をまとめて徴収すること。

(注二七) 青黄不接：端境期になつて食糧が不足すること。新しい穀物がまだ熟していないうちに古い穀物が底をつく状況。転じて、人材・物資が一時的に欠乏すること。

(注二八) 来游した：一八五四年、ペリー提督が日本を再訪し、三月三十一日幕府と「日米和親条約」を締結し、帰国途中、那覇に停泊し琉球とまた条約を結んだ。その後、基隆で約十日間停泊し、また上陸して炭鉱と港湾の地形を調査した。帰国後、台湾を米国の貿易中継地として占領すべきだという報告を提出した。

(注二九) エルベ号が：伊能嘉矩『臺灣文化志』下冊「外力

の進漸」百三十六頁に以下のようにある。「咸豐十年（西曆一八六〇年）東方亞細亞の遠洋航海に派遣せられし、獨國軍艦エルベ（Elbe）號は、臺灣南部海岸の番地に近づき、其水兵が端艇を下して上陸を試みんとせしに、番人の發銃しつゝ、抵抗するに遇ひ、水兵亦之に應じ、銃火を發して逆撃し、終に之を逃走せしめたり。其地點は詳ならざれども、蓋し南端なる南灣に入り、孰れかの地に上陸せんとして、土着生番（自称バイワン）の抵抗を受けたるものならん」。

（注三〇）釐金局…釐金を徴収する関所。釐金は貨物の内地通課税。咸豐三（一八五三）年、軍事費調達のため貨物に通行税を課したことに始まり、全国に広まった。

原文

同治元年春正月、地大震。三月、彰化戴潮春起事、陷縣城、兵備道孔昭慈死之。嗣圍嘉義、攻大甲、全臺俶擾。五月十一日、復大震、壞屋殺人。六月、以滬尾

海關歸總稅務司管轄。十月、頒全臺團練之制。詔蠲咸豐九年以前未徵正供。

二年冬十月、新任臺灣兵備道丁曰健以兵至竹塹。十一月、福建陸路提督林文察亦至、遂復彰化、斬潮春、餘黨漸平。詔開淡水採礦之禁。

三年、福州稅務司議准洋人開採雞籠之煤、許之。淡水人民爭墾南雅之地。

四年春三月、詔曰…「漳州賊匪未平、深恐勾結渡臺、爲入海之計。著曾元福、丁曰健仍遵前旨、於海口要隘、妥籌防範、毋令闖入臺地」。英人德克於淡水鼓勵種茶、自是茶業大興。倫敦長老教會始派牧師至府治傳教。

五年、移新莊縣丞於艋舺。英艦魯霧至琅璦、爲生番所擊。四月、淡水大疫。十一月、噶瑪蘭羅東分類械鬥、平之。

六年、美船那威至琅璦、爲生番擊、合兵討之。許洋人入內地採腦。十一月、地大震、淡水大水、壞屋殺人。七年、閩浙總督左宗棠奏請裁兵加餉、詔可。於是存

兵七千七百餘名、設道標營、布鹽制、歸兵備道管轄。
英人米里沙謀舉南澳之地。

八年秋九月、英兵夜襲安平、水師副將江國珍死之。
九年、始設通商總局、徵茶、腦、釐金及雞籠煤釐。
十年、日本琉球藩民遭風至琅璦、爲生番所殺。秋八月、大風、船舶多碎。

十一年、坎拿太長老教會始派牧師至淡水傳教。

十二年、日本以全權大使至北京、請討生番、不成。

十三年、日本以軍討生番。命福建船政大臣沈葆楨視師臺灣。事平、奏開番地、移駐巡撫、籌畫善後事宜、設團練總局。十月、詔建明延平郡王鄭成功祠、追諡「忠節」、以明季諸臣百十四人配、從臺灣人士之請也。

現代語訳

同治元（一八六二）年春正月、大地震が起きた。三月、彰化¹の戴潮春が反乱を起こして、県城を陥れ、兵備道の孔昭慈が殺された。後に嘉義を包囲し、大甲を

攻めた。台湾全域は甚だしく騷擾に陥った。五月十一日、ふたたび大地震が起き、家屋が壊れ人が死亡した。六月、滬尾（淡水）の税関を総稅務司の管轄に帰した。十月、全台団練の制度を頒布した。咸豐九年までの未徴収の正供を免除する、と詔勅が下された。

二（一八六三）年冬十月、新任の台湾兵備道の丁曰健^{（注二三）}は兵を以て竹塹に至った。十一月、福建陸路提督の林文察も至り、すぐに彰化を回復して潮春を斬った。残党も漸く平定された。淡水開鋌の禁止令を解除するとの詔勅が下された。

三（一八六四）年、福州稅務司から外国人が鶏籠炭鋌の採掘を批准するようにとの奏議があり、許可された。淡水の人民は南雅の地の開墾を争った。

四（一八六五）年春三月、詔勅が下された。「漳州の賊匪はまだ平定されず、糾合して台湾に渡り、海に入る恐れがあるため、曾元福、丁曰健は以前の聖旨に従い、沿海部の要塞にて取り締まりを適切にはかり、

台湾の地に勝手に入らせないようにせよ」。

イギリス人のドッド (Dodd) (注一三三) は淡水で茶の栽培を奨励してこれ以降茶業は大いに興った。ロンドン長老教会は(台南)府城に牧師を派遣して宣教を始めた。

五(一八六六)年、新莊県丞を艦艀に移した。イギリス軍艦のドブ (DOB) 号が琅瑤(恒春)に至り、生番に攻撃された(注一三四)。四月、淡水で疫病が大流行した。十一月、カバランの羅東で分類械闘が起きて平定された。

六(一八六七)年、アメリカの船舶ローバー (ROVER) 号が琅瑤(恒春)に至り、生番に攻撃された。兵を合わせて(生番を)討伐した(注一三四)。西洋人が内地に入り樟脳を採取することが許可された。十一月、大地震が起きた。淡水で大水害が起き、家屋が壊れ人が死亡した。

七(一八六八)年、閩浙総督の左宗棠は、(台湾に

おいて)兵員の縮減と昇給のことを上奏し、詔勅で許可された。これによって兵員は七千七百余名を維持し、道標營を設け、塩制を敷き、兵備道の管轄に帰した。イギリス人の米里沙が南澳の地の開墾をはかった。

八(一八六九)年秋九月、イギリス兵が安平を夜襲したため、水師副將の江国珍が死亡した。

九(一八七〇)年、はじめて通商総局を設けた。茶、樟脳の厘金および鶏籠の炭の厘金を徴収した。

十(一八七二)年、日本の琉球藩民は風に遭い琅瑤(恒春)に至って生番に殺害された。秋八月、強い風が吹き、船舶の多くが碎けた。

十一(一八七二)年、カナダ長老教会は、はじめて牧師を淡水に派遣し宣教活動を行った。

十二(一八七三)年、日本は全権大使を北京に行かせ、(清朝による)生番の討伐を請うたが、ならなかった。

十三(一八七四)年、日本は軍を率いて生番を討伐

した。(朝廷は) 福建船政大臣の沈葆楨に台湾の軍隊を視察させた。事件平定後、(沈葆楨は) 番地を開墾することと、巡撫を移駐することを上奏し、善後の事項を計画した。団練総局を設けた。十月、明の延平郡王鄭成功の祠を建てよと、詔勅が下された。(鄭成功を) 「忠節」と追諡し、明代の諸臣百十四人を合祀させた。これは台湾人士の要請を許可したのである。

(注 1111) 丁曰健：字は述安、号は述菴。直隸宛平の人。本籍は安徽懷寧。道光十五(一八三五)年の挙人。嘉義県知県などを歴任。(許雪姬他編『臺灣歴史辭典』、遠流出版事業股份有限公司、二〇〇四、四十五頁)。

(注 1112) ドッド：ジョン・ドッド (John Dodd、一八三八～一九〇七)。台湾ウーロン茶の父と呼ばれる人物。(呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、一〇七頁)。

(注 1113) 生番に攻撃された：一八六六年イギリス軍艦多仏

(DOB) 号が襲撃された事件や、一八六七年イギリス軍艦西維亜 (SILVIA) 号が襲撃された事件などを指す。

(注 1114) ローバー号事件：一八六七年三月十二日、米国船ローバー号が台湾で遭難し、その乗員が台湾原住民に殺害される事件。一八六七年三月十二日、恒春半島の瑯嶠沖で沈没した。船長のハント夫妻と乗員はボートで岸に避難したが、乗員一人を除いて、皆な原住民に殺害された。殺されなかった水夫は中国人で、打狗の英国副領事カロール (Charles Carol) に遭難を報告、事件は北京のアメリカ公使バーリングゲーム (Anson Burlingame) に知らされた。一方、カロール副領事は、安平に停泊していた英国砲艦コウモラント (Cormorant) の艦長ボード (George D. Board) に事件を通告、虐殺現地に赴いて生存者の有無を確かめるよう要請した。ボード艦長は三月二十六日、現地に到着し、生存者を探したが、原住民と衝突を起こし、搜索を断念した。アメリカのアモイ領事ルジャンドル (Charles W. Legendre、李仙得) は四月

一日に事件を通告され、福州に行つて閩浙總督にその配下の台湾官憲が被害者の搜索救難するよう申しこんだ。

その後、ルジャンドルは四月十八日、台湾府に赴き、道台呉大廷及び総兵劉明燈と搜索救難を交渉した。ルジャンドルは即刻現地に派兵するように要求したが、原住民は生蕃で派兵しても無駄であるのを理由に拒絶されたので、アシュエロット (Ashuelot) 砲艦のフェブリジャー艦長 (Captain John C. Febriger) と同行、現地に赴いたが、搜索救難はならず、アモイに戻った。(呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、一〇五頁)。

原文

光緒元年春、設臺北府、改淡水廳爲新竹縣、噶瑪蘭廳爲宜蘭縣、增設恆春、淡水兩縣。以南路同知駐卑南、北路同知爲中路、駐埔裡(里)社、各加撫民、以理番政。令福建巡撫冬、春駐臺、夏、秋駐省。開人民渡臺

入山之禁、從欽差大臣沈葆楨之請也。三月、討獅頭社番。北路統領羅大春通道至奇萊。宜蘭西皮、福祿兩黨相鬥、平之。

二年春、太魯閣番亂、討之。四月、澎湖大風。十一月、福建巡撫丁曰昌巡視臺灣。

三年春、曰昌奏豁臺灣雜稅。五月、恆春知縣周有基查勘紅頭嶼、收入版圖。奇密社番亂、討之。六月、臺南旋風、所過之處、屋瓦盡撤。冬、建埔裡(里)社廳城。

四年春、澎湖大風、通判蔡祥麟請賑。秋、臺東加禮宛、阿眉兩番亂、討之。

五年冬十月、福建巡撫勒方鐸巡視臺灣。建淡水縣儒學。

六年、建臺北儒學及登瀛書院。

七年春、福建巡撫岑毓英巡視臺灣。改團練總局爲培元總局。議移台湾道府一缺於彰化縣轄。建大甲溪橋、費款二十萬元。六月、臺南哥老會員謀起事、獲首謀者

二人、皆武弁也、殺之。八月、臺南府治大火。澎湖凶、官民賑之。

八年春、旗後擬建行臺并電報公所。九月、兵備道劉璈委員查勘新開道路及撫番事宜。

九年、築砲臺於西嶼。夏五月、臺南府治大火。法越事起、詔命各省籌辦防務。兵備道劉璈以臺灣孤懸海外、爲七省藩籬、防務最關緊要、而籌防之難、又較各邊省爲尤甚。外則四面環海、周圍約三千餘里、無險可扼；內則中互叢山、橫縱約二千里、生番偪處。議劃全臺爲五路、酌派五軍、分其責成、并辦水陸團練、籌款募兵、以爲戰備。

十年夏五月、以直隸陸路提督一等男劉銘傳任福建巡撫、治軍臺灣。夏、大疫、兵民多死。六月、法艦犯基隆、復犯滬尾、均擊退之。八月、法軍據基隆。銘傳退駐臺北。法軍遂封禁沿海。

現代語訳

光緒元（一八七五）年春、台北府を設置した。淡水庁を新竹県に、カバラン庁を宜蘭県に改め、恒春・淡水両県を増設した。南路同知を卑南^{（注二三五）}に駐在させ、北路同知を中路にして、埔裡（里）社に駐在させた。各々民を安らげ、以て番政を管理した。福建巡撫は冬と春は台湾に、夏と秋は福建省に駐在せよと命じられた。人民が台湾に渡り山に入る禁止令を解いた。これは欽差大臣沈葆楨^{（注三二六）}の要請によるものである。三月、獅頭社^{（注三二七）}の番人を討伐した。北路統領の羅大春^{（注三三八）}は奇萊まで道路を開通した。宜蘭で西皮・福祿両党は互いに闘争したが、平定された。

二（一八七六）年春、太魯閣^{（注三三九）}の番人が反乱を起し、討伐された。四月、澎湖島で大きな風災が起きた。十一月、福建巡撫の丁曰昌^{（注一四〇）}は台湾を巡視した。

三（一八七七）年春、丁曰昌は台湾の雑税を免除す

るように上奏した。五月、恒春知県の周有基（注一四二）

は紅頭嶼（注一四三）を視察調査し、版図に収めた。奇密

社（注一四四）の番人が反乱を起し、討伐された。六月、

台南でつむじ風が吹き、通過したところの瓦はすべて
壊された。冬、埔裡（里）社庁に城を建てた。

四（一八七八）年春、澎湖島で大きな風災が起きた。

通判の蔡祥麟は賑恤を要請した。秋、台東の加礼宛・
阿眉両族の番人が反乱を起こし、討伐された。

五（一八七九）年冬十月、福建巡撫の勒方錡は台湾
を巡視した。淡水県儒学を建てた。

六（一八八〇）年、台北儒学および登瀛書院を建て
た。

七（一八八一）年春、福建巡撫の岑毓英（注一四四）は

台湾を巡視した。団練総局を培元総局に改めた。台湾

道・府の一つの役職を彰化県管下に移そうという建議
を出した。大甲溪橋を建て、建築に二十万円の費用を
費やした。六月、台南哥老会員が反乱をはかったが、

首謀者二人を捕え、みな武弁であったため殺した。八
月、台南府下で大きな火災が起きた。澎湖島は凶作に
なり、官民は賑恤を行った。

八（一八八二）年春、旗後で官吏の行台（出張駐在
所）と電報公所の設置が計画された。九月、兵備道の
劉璈（注一四五）は人員を指定して、新たに開拓した道路
および番人を慈しむ案件（注一四六）に関して調査させた。

九（一八八三）年、（澎湖島の）西嶼に砲台を築いた。
夏五月、台南府下で大きな火災が起きた。

仏印（フランス領インドシナ半島）で（清国とフラン
スとの）衝突が起きたため、各省に防衛事務を計画せ
よとの詔勅が下された。

兵備道の劉璈は建議して以下のように述べた。台湾
は独りで海外に孤立しているが、七つの省の護りと
なったため、防衛事務はもつとも緊要に関わっている。
しかしその防衛事務の計画は各辺境の省よりも甚だし
く困難である。外部には四面を海に囲まれ、周りは

三千里余り、押さえられる険しい要所はない。内部には山々が中央に連なり、縦横は約二千里、生番が所せましと迫っている。台湾全体を五路を分け、事情に応じて五軍を派遣して、それぞれの責務をはっきりとさせ、ならびに水陸の団練を行い、経費を調達して戦闘に備えるように。

十（一八八四）年夏五月、直隸陸路提督一等男爵の劉銘伝（注一四七）を福建巡撫に任命し、台湾で軍備を整理させた。夏、疫病が大流行して、兵士も民も多く死亡した。六月、フランスの軍艦は基隆を犯し、また滬尾を侵犯したが、ことごとく撃退された。八月、フランス軍が基隆を占拠した。劉銘伝は台北まで後退し駐屯した。フランス軍は沿海部を封鎖した。

（注一三五）卑南…今の台東県卑南郷周辺のこと。プユマ族の居住地。

（注一三六）沈葆楨…福建省侯官県の人。字は翰宇、幼丹。道

光二十七年（一八四七）年の進士。洋務運動で中心的な役割を果たし、総理船政大臣及び南洋通商大臣を歴任。牡丹社事件の際には欽差大臣として台湾に赴任し軍務を監督した。『清史稿』卷四百十三に伝がある。

（注一三七）獅頭社…今の屏東県獅子郷周辺のこと。パイワン族の居住地。

（注一三八）羅大春…字は景山、貴州施秉の人。『臺灣海防竝開山日記』の著作がある。

（注一三九）太魯閣…現在の花蓮県周辺。

（注一四〇）丁日昌…字は禹生、広東豊順の人。『清史稿』卷四四八に伝がある。

（注一四一）周有基…『恒春縣志』卷三職官に「周有基、號麗生、廣東南海縣監生。光緒元年七月初五日任」とある。

（注一四二）紅頭嶼…現在の台東県蘭嶼郷周辺、タオ族の居住地。

（注一四三）奇密社…現在の花蓮県瑞穗郷周辺。アミ族の居住地。

（注一四四）岑毓英（一八二九～一八八九）…字は彦卿、号は匡国、廣西西林の人。光緒七（一八八二）年、福建巡撫に

着任し、台湾の防衛にあたつた。度々來台し、山地の開
発と原住民の慰撫に注力した。光緒一五（一八八九）年、
ベトナムで死去。（吳密察監修、遠流台湾館編著、横澤
泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、一一六頁）。

〔注一四五〕劉璈（？～一八八九）…字は蘭州、湖南臨湘の人。

左宗棠の部下として頭角を現す。光緒七（一八八二）年、
台湾道に着任。しかし、のちに派遣された劉銘伝と軋轢
が生じ、罷免され、流刑に処された。（吳密察監修、遠
流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、
二〇〇七、一二二頁）。

〔注一四六〕慈しむ案件…開山撫番。大陸から台湾への渡航制
限と、「番地」への入禁を全面的に解除し、未帰順先住
民を武力を用いてでも服従させた後、教化・授産等で実
効支配を確立し、並行して「番地」への大陸からの移民・
拓墾を奨励する政策。

〔注一四七〕劉銘伝（一八三六～一八九五）…字は省三、諡は壯

肅、安徽合肥の人。李鴻章に従って江陰・常州で連戦連

勝し、東西の念軍を壊滅させる。光緒十（一八八四）年、
台湾に着任し、翌年。初代台湾巡撫に就任。光緒二二
（一八九六）年、五九歳で死去。『清史稿』卷四百十六に
伝がある。

原文

十一年春二月、法艦攻澎湖、入據媽宮澳。三月、和
議成。銘傳奏請專駐臺灣籌辦善後。四月、澎湖復大疫、
耕牛多斃。九月、詔曰…「臺灣爲南洋門戶、關係緊要、
自應因時變通、以資控制。著將福建巡撫改爲臺灣巡撫、
常川駐紮。福建巡撫事務、即著閩浙總督兼管。所有一
切改設事宜、該督撫詳細籌議、奏明辦理」。於是銘傳
爲巡撫、兼理學政。置布政使司、設支應局、機器局、
營務處、電報總局、頒行保甲制度。九月、馬萊社番亂、
討之。

十二年春正月、大料坎番亂、銘傳自將討之。二月、
閩浙總督楊昌濬巡視臺灣。三月、詔曰…「閩、臺防務、

關係緊要。該督撫等商辦一切、務當和衷共濟、不分畛域、力顧大局。上年諭令該督撫等會議臺灣改設各事宜、并著一併妥議、毋稍遲延」。陞澎湖副將爲水師總兵、歸台灣巡撫就近節制。四月、銘傳至福州、與昌濬合奏改設事宜。五月、奏請清賦。六月、奏設撫墾總局、以太常寺少卿林維源爲全臺幫辦撫墾大臣。設善後、法審、官醫、伐木各局。九月、竹頭角番亂、討之。於是設置隘勇、改革屯政、從事撫墾。

現代語訳

十一（一八八五）年春二月、フランスの軍艦は澎湖島を攻めて媽宮澳（注二四八）を占拠した。三月、講和会議が成立した。劉銘伝はもっぱら台湾に駐在し善後を処理できるようにと上奏した。四月、澎湖島にふたたび疫病がはやり耕牛の多くが死亡した。

九月、詔勅が下された。「台湾は南洋の門戸として、緊要に関わっている。自ら時に基づいて対応し、統制

に資すべきである。福建巡撫を台湾巡撫に改め、常時（注一九四）駐在させよ。福建巡撫の事務はただちに閩浙総督が兼ねて管理させよ。すべての改革事項は、該当する総督・巡撫が詳細に討議計画の上、上奏して行うべきである」と。これによって劉銘伝は巡撫となり、兼ねて学政を管理した。布政使司（注二五〇）を置き、支応局・機械局・営務局・電報総局を設置して、保甲制度を施行した。九月、馬萊社の番人が反乱を起し、討伐された。

十二（一八八六）年春正月、大料岬の番人が反乱を起したが、劉銘伝は自ら軍隊を率いて討伐した。二月、閩浙総督の楊昌濬（注二五二）は台湾を巡視した。三月、詔勅が下された。「福建と台湾の防衛事務は緊要に関わっている。該当する総督・巡撫らはすべてのことを討議し実行する際、心を一つに助け合い、範囲を分けずに極力大局を見据えるべきである。昨年、該当する総督・巡撫らに台湾の改革緒事項を会議するように諭

告した。合せて妥当に協議し少しも遅延することないようにせよ」と。

澎湖島の副将を水師総兵に昇格し、台湾巡撫を近くで規律正しく統制できるようにさせた。四月、劉銘伝は福州に至り、楊昌濬とともに改革事項を上奏した。五月、地租改正（の実施）を上奏した。六月、撫墾総局（注一五〇）の設置を上奏した。太常寺少卿の林維源（注一五三）を全台撫墾大臣補佐にした。善後・法審・官医・伐木の各局を設置した。九月、竹頭角（注一五四）の番人が反乱を起し、討伐された。このため隘勇（注一五五）を設置し、屯兵制度を改革し撫墾に従事した。

（注一四八）媽宮澳…現在の澎湖県馬公市周辺。

（注一四九）常川…つねに。継続してやまない様子。絶えずに流れる川のとえ。常川往来。

（注一五〇）布政使司…承宣布政使司。布政使は各省に一名置かれる承宣布政使司の長官で、按察使と並び総督・巡撫

に直隸する地の官。

（注一五一）楊昌濬（一八二五～一八九七）…字は石泉、湖南湘鄉の人。『清史稿』卷四四七に伝がある。

（注一五二）撫墾総局…大嵙崁に総局が設置され、大嵙崁、南勢角、埔里、など八箇所の局を設けた。要所に駐屯する兵士と連絡し、生番鎮撫にあたった。（呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、一二五頁）。

（注一五三）林維源（一八四〇～一九〇五）…字は時甫、号は岡卿、淡水の人。『臺灣通史』卷四独立紀に「維源、淡水人家巨富」とある。原住民の慰撫や、鉄道の建設などの新政に重要な役割を果たす。台湾が日本に割譲されたのちは、厦門に渡り、当地で死去。（呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、一一六頁）。

（注一五四）竹頭角…現在の桃園市復興区周辺。タイヤル族の居住地。

〔注一五〕隘勇…清代、台湾原住民から成人を召集して編成した兵。原住民に対しての自警組織であり、日本統治下で警察官の管轄下のもと、生蕃の襲撃に備えるために置かれていた。

原文

十三年、建臺灣巡撫衙門。移北路協營於埔里社、駐副將。定大稻埕爲外國人商埠。五月、奏設鐵路、議自基隆至恆春、設釐金、招商、清道、樟腦、磺油各局。開西學堂、番學堂、電報學堂。改築澎湖、基隆砲臺、以整剔軍務。八月、阿冷番亂、討之。

十四年、設臺灣府、領臺灣、彰化、雲林、苗栗四縣。改前臺灣府爲臺南府、臺灣縣爲安平縣。陞臺東廳爲直隸州、基隆通判爲海防同知。建藩庫。頒行郵政。設煤務局於八堵、以候補道張席珍督辦、投費四十餘萬兩。内外臣工多所嫉忌、而臺灣紳士亦肆爲蜚語。七月、銘傳革職留任。八月、清賦畢。彰化施九緞以丈費故、糾

衆圍城、平之。卑南番亂、討之。

十五年春、建臺灣府考棚、各縣多建儒學、銘傳自蒞歲試。十一月、大嵙崁番亂、討之。

現代語訳

十三（一八八七）年、台湾巡撫衙門を建てた。北路協營を埔里社に移し、副將を駐在させた。大稻埕を外国人の貿易港にすることを定めた。五月、基隆から恆春までの、鉄道敷設の議論を上奏した。厘金・招商・清道・樟腦・磺（石）油の各局を設置した。洋学堂・番学堂・電報学堂を開いた。澎湖島・基隆の砲台を改築し、軍務を整頓した。八月、阿冷の番人が反乱を起し、討伐された。

十四（一八八八）年、台湾府を設置し、台湾・彰化・雲林・苗栗四県を管轄させた。前台湾府を台南府にし、台湾県を安平県にした。台東庁を直隸州にして、基隆通判を海防同知にした。藩庫を建て、郵便制度を頒布

した。煤務局を八堵に設置し、費用四十余万テールを投入して台湾道補佐の張席珍に監督運営させたが、内外の百官の多くは嫉妬し、忌み嫌い、台湾士紳もまたほしいままに流言蜚語を撒き散らしたため、七月、劉銘伝は張を革職留任（注一五六）とした。八月、地租改正を完了した。彰化の施九緞は田の測量費用の紛糾で民衆を糾合し台湾府城を包囲したが、平定された。卑南の番人が反乱を起し、討伐された。

十五（一八八九）年春、台湾府に科挙の試験場を建てた。各県に儒学が多く建てられた。劉銘伝は自ら歳試を監督した。十一月、大嵙崁の番人が反乱を起し、討伐された。

（注一五六） 革職留任…清代の官吏懲戒方法の一種。官職から

は離任させておきながら、その仕事を行う。袁枚の『隨園隨筆』革職留任に「今大臣革去頂戴、仍令在官辦事」とある。また、夏燮『中西紀事』閩浙再犯には「劉耀椿

系專防廈門大員、因失守之後奔赴大營、隨同大兵入廈收復、制使以其功過相抵、奏請革職留任」とある。

原文

十六年春正月、蘇澳番亂、銘傳自將平之。二月、日本駐福州領事上野專一來臺考察、歸著一論、謂臺灣物產之富、礦產之豐、一切日用之物無所不備、誠天與之寶庫也。然以臺灣政治因循姑息、貨置於地、坐而不取、寧不可惜。若以東洋政策而論、則臺灣之將來、日本人不可不爲之注意也。已而上海英領事亦來。三月、分戍各軍。九月、始鑄銀圓。飭各縣添設義塾。十月、銘傳以病奏請辭職、命布政使沈應奎署理。而臺灣籌設兩道、四府、二直隸州、十二縣之議、至是而止。

十七年春三月、以邵友濂任巡撫、新政盡廢。設通誌局。秋、大嵙崁五指山番亂、討之。

十八年、建欽差行臺於臺北。六月、射不力番亂、討之。

十九年、建明志書院。澎湖凶。通判朱上泮重建義倉。二十年、以臺北爲省會、設南雅廳。三月、朝鮮事起、臺灣戒嚴、以布政使唐景崧署巡撫。

現代語訳

十六（一八九〇）年春正月、蘇澳の番人が反乱を起し、劉銘伝が自ら軍隊を率いて平定した。二月、日本の駐福州領事である上野專一は台湾に調査に来た。帰国後、一論を著して以下のように言った。「台湾は物産・磁産が豊かであり日用品のすべてに備えないものはない。誠に天が与えた宝庫である。しかし、台湾の政治は古い習慣ややり方にとられて改めようとせず、その場しのぎに終始している。宝は地に置かれており、座視して取る労を惜しまずにいられるだろうか。もし、東洋の政策をもって論じるならば、すなわち台湾の将来に日本人は注意をせねばならぬ」と。やがて上海のイギリス領事もまた台湾に来た。

三月、各軍を辺境におもむかせて守らせた。九月、銀貨を鑄造し始めた。各県に義塾の増加設置を命令した。十月、劉銘伝は病気を理由に辞職を上奏した。布政使の沈応奎が代理に命じられた。台湾道・四府・二直隸州・十二県を設置する議論はここに至って取り止めた。

十七（一八九一）年春三月、邵友濂^{（注一五七）}は巡撫に任命された。新政はすべて廃止した。通誌局を設置した。秋、大料崁五指山の番人が反乱を起こし討伐された。

十八（一八九二）年、台北で欽差行台が建てられた。六月、射不力^{（注一五八）}の番人が反乱を起こして、討伐された。

十九（一八九三）年、明志書院が建てられた。澎湖島は凶作になった。通判の朱上泮^{（注一五九）}は義倉を建て直した。

二十（一八九四）年、台北を省の首府にした。南雅

庁を設置した。三月、朝鮮で事が起きて台湾は戒厳し、布政使の唐景崧^(注一六〇)は巡撫に任命された。

^(注一五七) 邵友濂(？)一九〇二…本名は維埏、字は小村、

浙江余姚の人。光緒十三(一八九一)年、台湾布政使に

着任するも、光緒十五(一八九三)年病のため離任。光

緒十七(一八九五)年台湾巡撫に着任。緊縮政策を推し

進める一方、金鉱の採掘や鉄道建設などを推進した。光

緒二十七(一九〇二)年死去。(呉密察監修、遠流台湾

館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、

二〇〇七、一三〇～一三一頁)。

^(注一五八) 射不力…現在の獅子郷丹路及び草埔等の村にあた

る地域。パイワン族の居住地。

^(注一五九) 朱上泮…父は朱明亮。光緒二十一(一八九五)年、

四十九歳で陣没。

^(注一六〇) 唐景崧(一八三八～一九二四)…字は維卿、広西灌

陽の人。同治四(一八六五)年の進士。光緒二十(一八九四)

年、台湾巡撫に就任。日清戦争後、台湾は日本に割譲されたため、清朝から唐景崧に台湾を離れるよう勅令が下った。しかし、唐景崧は台湾の有力者とともに台湾民主国を建国し、国際社会の干渉を画策したが、日本軍の上陸後総崩れとなり、厦門に逃走した。(呉密察監修、遠流台湾館編著、横澤泰夫訳『台湾史小事典』、中国書店、二〇〇七、一三一頁)。

付記

本稿は『帝京史学』第三二号に掲載した、「連雅堂撰『臺灣通史』訳註―第四回 卷三 經營紀―」の改訂稿である。今回の改訂にあたり、前回掲載の際、本研究会の不手際によって不十分であった注釈の補完や、図版の入れ替えを行った。

本稿の改訂は臺灣通史研究会のメンバーである蔡易達が現代語訳を担当し、関康祐（中央大学文学研究科博士前期課程一年生・本学史学科卒業生）・後藤健一郎（本学史学科四年生）・吉田博紀（本学史学科四年生）が諸作業を担当した。

（蔡 易達）



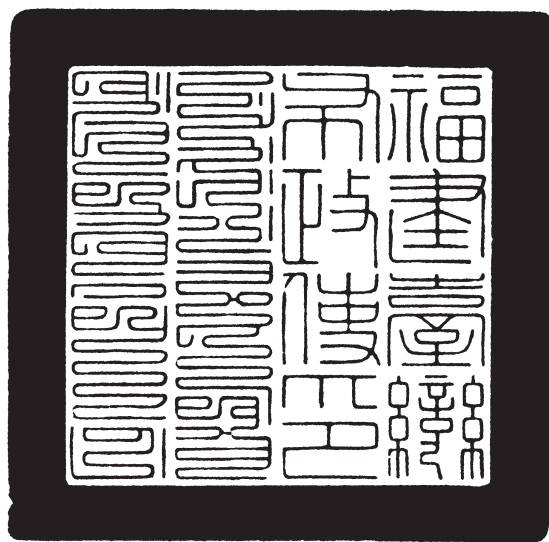
【写真1】施琅像



【写真2】延平郡王祠



【写真 3-1】巡撫印（福建臺灣巡撫關防）



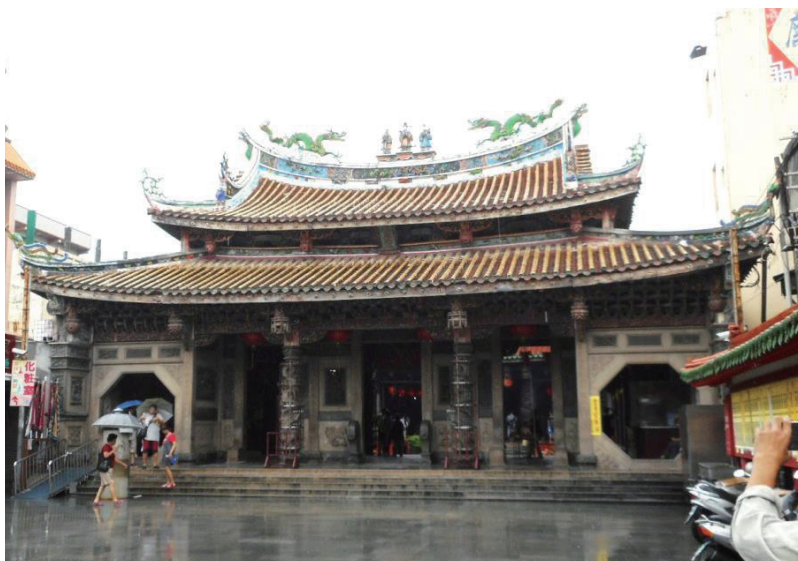
【写真 3-2】布政使印（福建臺灣布政使印）



【写真4】沈葆楨像



【写真5】淡水 紅毛城（関康祐 撮影）



【写真6】鹿港 媽祖廟（関康祐 撮影）



【写真7】劉銘伝胸像（関康祐 撮影）



【写真9】大日本琉球藩民五十四名の墓



【写真8】唐景崧 中国歴代人物図像数抛庫 より

『臺灣通史』卷三・經營紀 略年表

元号	西暦	月	出来事
康熙二十二	一六八三	一	清朝が台湾を平定。施琅の上奏により福建省所属となる。
二十三	一六八四	春	文武官僚が台湾に着任、税と土地を計上。
二十四	一六八五		台湾府に学校を建てることとなり、春秋の上丁の日に釈菜の礼を行う。
二十五	一六八六		総督の王新命と巡撫の張仲舉に毎年文武童生を各二十名、(科挙)の文童生を二十名、廩膳生二十名を推挙するよう上奏。
二十六	一六八七		台湾人が福建の郷試を受験することが許可される。
二十七	一六八八		康熙錢の鑄造が開始される。
三十一	一六九二		康熙錢の鑄造を停止。
三十三	一六九四		『初修臺灣府誌』が完成。
三十四	一六九五		知府の靳治揚が初めて熟番の社学を設ける。
三十五	一六九六	七	新港の呉球は蜂起を計画するが、失敗し殺される。
三十六	一六九七		浙江省仁和の郁永河が初めて北投へ行き、硫黄を煮て番社を訪ね歩く。
三十八	一六九九	二	吞霄社土官の卓介(個)、卓霧、亜生が反乱を起こす。
		五	淡水社土官の氷冷も反乱に呼応。

三十九	一七〇〇		七	水師が淡水に至り、氷冷を捕らえて殺す。
四十	一七〇一	十二	八	清朝が北路参将常泰を派遣し、岸裡社の番族を以て吞霄社を襲撃。卓介、卓霧、亜生を生け捕りにし、処刑。
四十二	一七〇三	二		「明延平郡王鄭成功及び子の鄭經を福建省南安に帰葬させ、墓守を設けて祠を置く」という詔勅を賜る。
四十三	一七〇四	冬		諸羅県の劉却が反乱を起し、下茄苳營を焼く。
四十四	一七〇五			近辺の熟番も反乱を起こすが討伐される。劉却是敗走。
四十六	一七〇七	冬		劉却が再び反乱を謀るが、失敗し殺される。
四十七	一七〇八			崇文書院を建設する。
四十九	一七一〇			「飢饉が発生したため、三県（諸羅・台湾・鳳山）の年貢を免除する」との詔勅が下される。
五十	一七一一			諸羅県に学校を建設する。
				「飢饉が発生したため、年貢の十分の二を減免する」との詔勅が下される。
				泉州の陳頼章が熟番と契約を結び、大佳臘の平野を開墾する。
				淡水庁に防兵を設け、三年に一交代と定める。
				台湾府に万寿宮を建設する。

五十一	一七二二		「今年の年貢を免除する」との詔勅が下される。
五十二	一七二三		「五十年の丁冊を基準に、その後増えた人口には永遠に課税しないように」との詔勅が下される。
		夏	北路営参将阮蔡文は自ら竹塹、大肚諸社に赴き、番黎を慰撫する。
五十三	一七二四	秋	政府の所在地で大火が発生する。
			大旱が発生する。「台湾と鳳山両県の年貢の十分の三を減免する」との詔勅が下される。
			天主教の神父マイラーに台湾の経度の測量を命じる。
五十四	一七二五		閩浙総督滿保が生番の帰順などについて上奏し、許可される。
五十五	一七二六	五	福建巡撫の陳璘が防海の法を上奏する。諸羅知県の周鍾瑄が許可する。
五十六	一七二七	冬	飢饉が発生する。「本年の年貢の十分の三を減免する」との詔勅が下される。
五十八	一七二九		初めて『鳳山縣誌』が編纂される。
五十九	一七三〇		海東書院を建設する。
		十	朔日に大地震が起こる。
			再度地震が起こる。
		十二	「番族と民の年賦・年貢を免除する」との詔勅が下される。

六十	一七二二	五	朱一貴が岡山で反乱を起こし、台湾府を突破する。総兵の欧陽凱、副將許雲が戦死する。
六十	一七二二	六	清軍、鹿耳門を攻略し台湾府に迫る。朱一貴は捕われ、北京で磔刑。
六十	一七二二	八	災害により「徴収すべき年賦・年貢を免除し、公金で被災者を救済する」との詔勅が下される。
六十	一七二二	五	水陸両中営の撤廃について朝議する。
六十	一七二二	五	御史の呉達礼、黄叔瓚が京師から来る。
六十	一七二二	五	満保が民の強制遷移などを建議したが、藍廷珍の上訴書により取りやめる。
六十	一七二二	五	阿里山、水沙連各社の番族が招撫に従う。
六十	一七二二	五	鳳山の赤山が爆発する。
雍正元	一七二三		「朱一貴の乱により功績を立てたすべての將軍と兵士に昇級を叙すること を朝議する」との詔勅が下される。
二	一七二四		傀儡番が反乱を起こすが、討伐される。
二	一七二四		「康熙十八年から五十年まで各省が滞納した年貢などを免除する」との詔 勅が下される。
二	一七二四		初めて『諸羅縣誌』が編纂される。

三	四	五	六	七	八	九	十
一七二五	一七二六	一七二七	一七二八	一七二九	一七三〇	一七三一	一七三二
七	七	七	七	七	七	七	七
<p>「番族女性の人頭税を免除する」との詔勅が下される。</p> <p>この年より政府が塩の製造管理を行う。</p> <p>水沙連の番族が反乱を起し、兵備道呉昌祚が討伐する。</p> <p>「福建の武官を戒め、台湾の交代兵士を慎重に選抜するように」との詔勅が下される。</p> <p>巡視台湾御史尹秦の上奏により社田を定め、開拓民の土地とそれ以外の土地が区別された。</p> <p>台厦道を台湾道に改める。</p> <p>台湾鎮総兵王郡は「字識、舵取り、操帆手、斗手などを現地で募集する」ことを上奏したが認可されず。</p> <p>「台湾の守備兵士に毎年銀四万テールの生活補助金を給与する」との詔勅が下される。</p> <p>山猪毛の番族が反乱を起したが、総兵の王郡が討伐する。</p> <p>「巡視台湾御史は新旧併用すべき」との詔勅が下される。</p> <p>大甲西社の番族が反乱を起したが、総兵呂瑞麟が討伐する。</p> <p>鳳山の呉福生が反乱を起し、埤頭を攻め、守備の張玉が戦死する。</p>							

乾隆 元			
一七三六	十三 一七三五	十二 一七三四	十一 一七三三
	十二 十		六
<p>元の総兵である王郡が軍を率いて平定する。</p> <p>総督の郝玉麟は呂瑞麟を台湾府に呼び戻し、王郡を檄して大甲西社の番族を討伐、平定する。</p> <p>彰化県に「雍正八年に未徴収の正供等の項目の税を免除する」との詔勅が下される。</p> <p>大学士の鄂爾泰が「台湾の居住民は家族を連れて台湾に入ること」を許すべき」と上奏し、批准される。</p> <p>「台湾府属の荘租の十分の三を免除する」との詔勅が下される。</p> <p>総督郝玉麟が「台湾道の官吏を『鎮協之例』に照らし、昇任すべきである」と上奏して批准される。</p> <p>総督郝玉麟が「台湾に転任し四十歳を過ぎて子供のいない者は、家族を連れて台湾に渡ることを許すべき」と上奏し批准される。</p> <p>「各省の正供と官租の三分の一を免除する」との詔勅が下される。</p> <p>眉加臘の番族が反乱を起こす。副將の靳光瀚、同知趙奇芳がこれを討伐する。</p> <p>諸羅県湾裡街で大地震が起こる。銀三千テールが賑恤される。</p> <p>人頭税が銀二錢に制定される。書院規則が頒布される。</p>			

十一	一七四六	九	台湾府所轄二庁四県の翌（二七四六）年度の税額十六万石がすべて免除される。
十二	一七四七		台湾人民が家族を連れての台湾渡航が批准される。
十五	一七五〇		台湾の人頭税を土地税に併合する。
十七	一七五二	八	淡水八里坌の巡検を新莊に移す。
十八	一七五三		強風被害。知府の方邦基が南日島で溺死する。
十九	一七五四	七	台湾監察御史巡視の規則制定。台湾道が提督学政を兼任。
二十	一七五五	四	強風による大火。文廟の櫺星門が倒壊した。
二十三	一七五七	九	台湾・鳳山・彰化三県の乾隆十五年に水没した田の田賦を免除した。
二十四	一七五九	十	淡水に大地震。毛少翁社が水没した。
		十二	諸羅で強風。稲穂を損ねたため、年貢の徴収が緩和される。
			諸羅県の乾隆十五年に水没した田賦を免除される。
			澎湖島で強風。監視船の多くが沈没する。
			通事・社丁の規則を廃止。不法開墾を禁止する。
			諸羅県で三日にわたる暴風雨。年貢の徴収が緩和される。
			淡水都司を艋舺に移動。玉峰・白沙書院を建設する。
			台湾県知県夏瑚が義捐金で、台湾で客死した柩を廈門に運び、親族に引き

四十七	四十五	四十三	四十一	三十六		三十五	三十三	三十一	二十九	二十八	二十七	二十六	二十五
一七八二	一七八〇	一七七八	一七七六	一七七一		一七七〇	一七六七	一七六六	一七六四	一七六三	一七六二	一七六一	一七六〇
			十一		九	正							
<p>渡すことを提案する。</p> <p>詔があり、台湾人民が家族を連れて台湾で同居することを許可される。</p> <p>新港の巡検を斗六へ移動。</p> <p>淡水庁の乾隆二十四年の劃出界外の園賦を免除。</p> <p>明志書院を建設。</p> <p>福建省出身者が台湾籍として受験することを禁止する。</p> <p>鹿港同知を設置。民と番族の交渉事務を管理する。</p> <p>漳州の呉漢生がカバランに入り、開墾した。</p> <p>台湾府下の枋橋頭で火事。</p> <p>真武廟の前で火事。家屋百棟余りを焼く。</p> <p>台湾黄教が反乱したが、平定される。</p> <p>台湾府属の額徴供粟十六万石余りを免除。</p> <p>大地震。諸羅県の被害が甚大であった。</p> <p>台湾県・鳳山県で水害被害の田賦を免除。</p> <p>台湾府属の額徴供粟を免除。</p> <p>淡水、彰化の漳州・泉州の籍民が分類械闘を起こす。巡撫雅徳の上奏し、</p>													

四十八	一七八三		これを厳しく査察対処せよと詔勅が下る。
四十九	一七八四		漳州・泉州の籍民が分類械闘を起こす。乱を起した首謀者の財産を没収。
五十一	一七八六	十一	鹿港における通商を開始せよとの詔勅が下る。 武弁更代の例を制定。
			彰化の林爽文が反乱。邑治を攻略。知府孫景燧・理番同知長庚・摂県事劉 亨基・都司王宗武らを殺害。
			また諸羅・淡水を攻略。鳳山の莊大田はこれに呼応したため、府治は厳戒 態勢。
五十二	一七八七	正	福建陸路提督黃仕簡・水師提督任承恩は、軍隊を率いて台湾に至ったが、 偵察を行った。
		十	協弁大学士福康安・侍衛内大臣海蘭察が滿漢の弁兵を率いて台湾に赴く。
五十三	一七八八		彰化を恢復。林爽文・莊大田を捕え、南北ともに平定される。
		二	屯丁の制を公布。
五十五	一七九〇		淡水に大雪が降り飢饉が発生、米価が高騰。
五十六	一七九一	八	台湾府の供粟を内地の例に倣い、三年間免除する。新莊に県丞設置する。 ポーランド人のモーリス・ベリオスキー（麦礼荷斯基）が台東へ至り、開

五十七 六十	一七九二 一七五九	嘉慶元	二 四 五 七 八 九 十
三	秋	一七九六 一七九七 一七九九 一八〇〇 一八〇二 一八〇三	十一 十二
拓を試みる。 八里坌を開放し、通商せよとの詔勅が下る。 彰化の陳周全が反乱。北路同知朱慧昌・鹿港營游擊曾紹龍・副將張無咎・署知県朱瀾らが死亡。総兵哈当阿が平定する。	暴風雨に見舞われ晚稲の多くが損失。詔勅により被害の調査と給付金・米の貯蔵などが行われた。 淡水の楊兆謀が反乱。知府遇昌・同知李明心が楊兆謀を誅殺。 乾隆六十年まで未納の正供を免除する。 天地会・分類械闘を禁止の詔勅。 小刀会の白啓が反乱を謀ったが、誅殺される。 海賊の蔡牽が鹿耳門を侵犯したため、福建水師提督李長庚に平定せよとの詔勅が下る。 彰化熟番の土目潘賢文は一族を率い、カバランで漢人と開拓地を争う。 蔡牽再び淡水を侵犯する。 蔡牽が鹿耳門を占拠。山賊の呉淮泗・洪老四がこれに呼応する。 蔡牽が鳳山を陥落させ、府治は嚴重警戒を敷く。	十一 十二	三 四 六 春 十 十一 十二

十一	一八〇六	二	淡水で漳州・泉州籍民の分類械闘が発生。巡道慶保がこれを平定する。
十二	一八〇七		淡水で義倉を増設する。
十三	一八〇八		艋舺に水師游撃を設置し、水陸の弁兵の管理を兼任させる。
十四	一八〇九	五	詔勅により福建総督・將軍は三年に一度、順繰りで台湾に赴任するように決定。
		八	淡水で漳州・広東籍民が泉州籍民と分類械闘が発生。知府楊廷理が平定する。
十五	一八一〇	三	蔡牽の反乱が平定される。
十六	一八一一	四	閩浙総督の方維甸が台湾に着任。
			方維甸カバランを版図に編入することを上奏し、許可される。
十七	一八一二	六	閩浙総督汪志伊は船を雇い、台湾から福建へ兵糧と兵士の家族の米穀を自ら運ぶことを上奏した。
			淡水で高夔が反乱を起こしたが、平定される。
		二	カバラン庁を設置。
十八	一八一三		澎湖島で飢饉が発生。詔勅により官庁などの公費によって、被災民を賑恤する。
			アヘンの輸入を禁止。

五	四	三	二	道光元	十九	二十一	二十二	二十三	二十五
一八二五	一八二四	一八二三	一八二二	一八一	一八一四	一八一六	一八一七	一八一八	一八二〇
七	十一	十	五	十一	九	七	七	四	三
<p>詔勅によりカバランの土地調査等を命じる。</p> <p>福建巡撫孫爾準が台湾到着、埔里社の開墾を建議する。</p> <p>台湾道に水陸營兵の管轄兼任を命令する。</p> <p>詔勅により台湾の守備兵士の交代法令を改めて、艋舺營遊撃を参将とした。</p> <p>詔勅により趙慎畛らの上奏した「清莊の法」を批准する。</p>					<p>福建省の、保甲制度の長の管轄権分配を禁止する。</p> <p>鹿港巡檢を大甲に移動。</p> <p>淡水に初めて学宮を建設。彰化訓導を竹塹に移動。</p> <p>彰化知県楊桂森が台運の中止を提案、福建省はこれを不許可とする。</p> <p>台南の天后宮が火災に遭う。</p> <p>海賊の盧天賜が滬尾を侵犯。この際、游撃の李天華は負傷し死亡する。</p> <p>海賊の林烏興が滬尾を侵犯するが、駆逐される。</p> <p>大雨が降り、曾文溪の堤防が決壊する。その泥が台江を塞ぎ平野になる。</p> <p>カバランの匠首林泳春は反乱を謀ったが、水師提督許松が平定する。</p> <p>北路理番同知鄧伝安は埔里社に入り、その地を開拓し官署を設けるべきと建議する。</p>				

六	一八二六	五	淡水で閩・粵の分類械闘が発生する。
七	一八二七	十二	山賊の黄斗奶は生番を導き、中港に侵攻。閩浙総督孫爾準が台湾に到着し、兵を以て平定する。
八	一八二八		鎮・標の左右両営を撤廃する。
十	一八三〇		陳集成公司が大嵵崁の開墾を開始。
十一	一八三一	八	閩浙総督孫爾準の奏議により、各省のアヘン栽培・売買を禁止する。
十二	一八三二		カバランの荷担ぎ人夫が械闘を起こすが、平定される。
十三	一八三三	八	淡水同知婁雲が保甲の規定を頒布する。
十四	一八三四	七	詔勅により澎湖島の雜項徵収を猶予した。
十五	一八三五	十一	嘉義の張丙が鳳山で反乱を起こす。
		九	福建陸路提督馬濟勝が張丙の反乱を平定する。
		八	詔勅により総兵劉廷斌に張丙の反乱の処分議論と職務の厳格化を指導。
			淡水で漳州・泉州の械闘が起こるが、平定される。
			械闘対策のために後壟に築城する。
			詔勅により道光十年までの未納正供を免除する。

十七	一八三七		紋銀の海外輸出を禁止する。文甲書院を建設。
十九	一八三九		詔勅によりアヘンの取り締まりに一年六か月の猶予を設けて徹底させ、役人の処罰厳格化を命令する。
二十一	一八四一	七	イギリス軍艦が鶏籠の沿海部を偵察。総兵達洪阿・兵備道姚瑩が防衛行動をし、イギリス軍艦を退却させる。
		十二	詔勅により王得禄を台湾に移駐。朱成烈の上奏により埔里社の開墾を議論する。
二十二	一八四二	二	イギリス船が大安港を侵犯したが、退却させる。
二十三	一八四三	三	草烏の匪賊の船舶が竹塹以南の各港を侵犯する。
二十四	一八四四	四	台湾全域の正供を折色徴収に変更する。
			台湾県の折色徴収に対して保西里住民が反乱し、詔勅によって知県の閩圻が逮捕される。
二十五	一八四五		詔勅により未納正供を免除。
二十七	一八四七	四	福建総督劉韻珂が台湾に着任し、埔里社を巡視。埔里社を版図に収めるよう上奏するも、朝議で不許可となる。
			台湾県の鍾阿三・鄒意狗・洪紀らが反乱を謀るも誅殺される。

二十八 三十	一八四八 一八五〇	六	徐宗幹が巡道に任命され、改革を行う。 淡水で洪水。澎湖でも災害が起こる。官民が一致して救済を行ったため、褒美の聖旨が下される。
咸豊元	一八五一	三	澎湖島で大風災が発生し、鎮道が合同議論を行い、銀五千テールが支給される。 詔勅により福建総督・巡撫の権限で救済を処理させ、租税の徴収を二年先延ばしにし、民の財力発展をはかる。 詔勅により総督・巡撫らによる被害調査、速やかに上奏させる。 西洋からの輪船が滬尾に来港。鶏籠を貿易港とし、例に照らして納税させる。 澎湖島で大風災。台湾から福建への郷試船が草嶼付近で沈没する。 鳳山の林恭が反乱。県府は陥落し府城が包囲される。カバランの呉磻も反乱を起こすが、ついで平定される。 淡水で漳州・泉州籍民の分類械闘が発生する。咸豊銭を鑄造。 淡水で福建・広東籍民の分類械闘が発生する。 海賊の黄位が鶏籠を占拠するも、これを平定する。アメリカの水師提督ペリーが来航。
二 三 四	一八五二 一八五三	六 四	
四	一八五四	正 六 四	

五	一八五五	前年の械闘が続く。枋橋・房裏にそれぞれ築城する。 黄位が再度鶏籠を侵犯。 イギリス人は条約を結び、樟腦の採取を開始する。 天津条約に従い、滬尾・鶏籠・安平・旗後を商業港として開港する。 全台釐金局を設置し、兵備道に管理させる。 彰化の戴潮春が反乱し、県城を陥落させ、兵備道孔昭慈を殺害する。 嘉義を包囲し、大甲に侵攻。 滬尾の税関を総稅務司に管轄させる。 全台に団練制度を頒布する。詔勅により咸豊九年までの未徴収正供を免除する。 新任の台湾兵備道丁曰健は兵を率い竹塹に駐屯する。 福建陸路提督林文察が合流し、彰化を奪還して潮春を斬る。 詔勅により「淡水開釐禁止令」を解除する。 福州稅務司から外国人の鶏籠の炭釐採掘権を批准せよとの奏議があり許可。 詔勅により曾元福・丁曰健に漳州籍民の取り締まりを命令する。	八	一八五八
十	一八六〇		十一	一八六三
十一	一八六一		六	一八六四
同治元	一八六二		三	一八六五
四				

五	一八六六	十一	<p>イギリス人ドッド (Dodd) が淡水で茶の栽培を奨励。 新莊県丞を艫舦に移動。</p> <p>イギリス軍艦のドブ (DOBU) 号が琅瑤に流着するも生番に襲われる。</p> <p>カバランの羅東で分類械闘が起こるも、平定される。</p> <p>アメリカ船舶のローバー (ROVER) 号が琅瑤に流着するも、生番に攻撃される。兵を合せて生番を討伐する。</p> <p>西洋人による内地での樟脳採取が許可される。</p> <p>閩浙総督左宗棠が台湾兵員の縮減と昇給上奏し、詔勅で許可される。</p> <p>道標宮を設置し、塩制が開始する。</p> <p>イギリス人の米里沙が南澳の地の開墾を開始する。</p> <p>イギリス兵が安平を夜襲し、水師副将江国珍が死亡する。</p> <p>通商総局を設置。茶・樟脳および鶏籠の炭から厘金を徴収する。</p> <p>日本の琉球藩民が遭難し、琅瑤で生番に殺害される。</p> <p>カナダ長老教会が牧師を淡水に派遣し、宣教活動を開始する。</p> <p>日本が全権大使北京派遣し、清朝による生番の討伐申請を行ったが許可されず。</p>
六	一八六七		
七	一八六八		
八	一八六九		
九	一八七〇		
十	一八七一		
十一	一八七二		
十二	一八七三		

十三	一八七四	十	<p>日本は軍を率いて生番を討伐する（台湾出兵）。清朝は福建船政大臣沈葆楨に台湾の軍隊を視察させる。</p> <p>団練総局を設置。沈葆楨が番地開墾、巡撫移駐を上奏する。</p> <p>「延平郡王鄭成功の祠を建てよ」との詔勅が下る。</p>
光緒元	一八七五	春	<p>台北府を設置。淡水庁を新竹県に、カバラン庁を宜蘭県に改め、恒春・淡水両県を増設する。</p> <p>南路同知を卑南に駐在させる、北路同知を中路として埔裡社に駐在させる。</p> <p>欽差大臣沈葆楨の要請により人民が台湾に渡り、入山することの禁止令を解除する。</p> <p>獅頭社の番人を討伐する。北路統領羅大春が奇萊までの道路を開通した。</p> <p>宜蘭で西皮・福祿の両派が闘争したが、平定された。</p> <p>太魯閣の番人が反乱を起したが、討伐される。</p> <p>福建巡撫丁曰昌が台湾を巡視する。</p> <p>丁曰昌が台湾の雑税免除を上奏する。</p> <p>恒春知県の周有基は紅頭嶼を視察調査し、これを版図に収める。奇密社の番人が反乱するも、討伐される。</p>
二	一八七六	春	
三	一八七七	五 春	

十	九	八	七	六	五	四	
一八八四	一八八三	一八八二	一八八一	一八八〇	一八七九	一八七八	
五		九 春	六 春		十	秋	冬
<p>埔里社庁に築城。</p> <p>台東の加礼宛・阿眉両族の番人が反乱するも、討伐される。</p> <p>福建巡撫勒方鐸が台湾を巡視する。淡水県儒学が建設される。</p> <p>台北儒学および登瀛書院が建設される。</p> <p>福建巡撫岑毓英が台湾を巡視する。団練総局を培元総局に改める。</p> <p>台湾道・府の仕事に一部を彰化県管下へ移動の建議をする。</p> <p>大甲溪橋を建築。</p> <p>台南哥老会員が反乱を謀り、首謀者二人を捕え誅殺する。</p> <p>旗後で官吏の行台と電報公所の設置が計画される。</p> <p>兵備道劉璈は人員を選び、道路の開拓および番人の管理の現状調査を行う。</p> <p>澎湖島の西嶼に砲台を設置する。</p> <p>フランス領インドシナ半島で清国とフランスとの衝突が発生、各省に防衛事務を計画せよとの詔勅が下る。</p> <p>兵備道劉璈が、水陸私兵の訓練の実施・経費調達・戦闘準備を建議する。</p> <p>直隸陸路提督一等男爵の劉銘伝を福建巡撫に任命し、台湾の軍備整理を命令する。</p>							

十二					十一				
一八八六					一八八五				
五	四	三	二	正	九	三	二	八	六
<p>馬葉社の番人が反乱するも、討伐される。</p> <p>大崙岬の番人が反乱を起こすも、劉銘伝が討伐。</p> <p>閩浙総督楊昌濬が台湾を巡視する。</p> <p>詔勅により総督・巡撫ら、台湾の改革緒事項を協議する。</p> <p>澎湖島副将を水師総兵に昇格、台湾巡撫による統制を可能に。</p> <p>劉銘伝が福州に至り、楊昌濬とともに改革事項を協議し上奏する。</p> <p>地租改正を上奏。</p>					<p>フランス軍艦が基隆・滬尾を侵犯するも、これを撃退する。</p> <p>フランス軍が基隆を占拠。劉銘伝は台北まで後退する。フランス軍、沿海部を封鎖。</p> <p>フランス軍艦は澎湖島に進攻し、媽宮澳を占拠。</p> <p>講和会議が成立。劉銘伝、台湾駐在と戦後処理の上奏。</p> <p>詔勅により福建巡撫を台湾巡撫へ改変および常駐させる。</p> <p>劉銘伝が巡撫に就任、学政の管理を兼ねる。</p> <p>布政使司が支応局・機械局・営務局・電報総局を設置し、保甲制度を施行する。</p>				

	<p>十三</p> <p>一八八七</p>	<p>六</p>
<p>撫墾総局の設置を上奏。太常寺少卿林維源が全台撫墾大臣補佐に就任。善後・法審・官医・伐木の各局を設置。</p> <p>竹頭角の番人が反乱、これを討伐し隘勇を設置。</p> <p>屯兵制度の改革を行い、兵を撫墾に従事させる。</p> <p>台湾巡撫衙門を建築。北路協営を埔里社に移動し、副将を駐在させる。</p> <p>大稻埕を貿易港に定める。</p> <p>基隆・恒春間鉄道敷設の議論を上奏。厘金・招商・清道・樟腦・磺油の各局を設置。洋学堂・番学堂・電報学堂を建設。</p> <p>澎湖島・基隆の砲台を改築し、軍務を整頓させる。</p> <p>阿冷の番人が反乱し、これを討伐する。</p> <p>台湾府を設置。元台湾府を台南府に、台湾県を安平県に改める。</p> <p>台東庁を直隸州に、基隆通判を海防同知に変更。藩庫を設置し、郵便制度を頒布。</p> <p>煤務局を八堵に設置。費用四十余万テールを投入し、台湾道補佐張席珍に監督運営させたが批判多数。</p> <p>劉銘伝が張席珍を革職留任処分とする。</p>	<p>九</p>	<p>七</p>
	<p>十四</p> <p>一八八八</p>	<p>八</p>

十八	十七			十六		十五		八
一八九二	一八九一			一八九〇		一八八九		
秋	三	十	九	三	二	正	十一	春
<p>地租改正が完了する。</p> <p>彰化の施九緞は田の測量費用問題が紛糾したため、民衆を糾合し台湾府城を包囲するも、平定される。</p> <p>卑南の番人が反乱するも、討伐される。</p> <p>台湾府に科挙試験場を設置。各県に儒学が多く建てられる。劉銘伝が自ら歳試を監督する。</p> <p>大嵙崁の番人が反乱するも、討伐される。</p> <p>蘇澳の番人が反乱、劉銘伝、自ら軍隊を率い平定。</p> <p>日本の駐福州領事上野專一が台湾を調査。</p> <p>上海のイギリス領事が台湾を来訪。</p> <p>各軍を辺境守備へ派遣。</p> <p>銀貨の鑄造を開始。各県に義塾の設置を増やす命令。</p> <p>劉銘伝が病氣を理由に辞職を上奏。布政使沈応奎が代理に任命される。</p> <p>邵友濂が巡撫に任命される。新政が廃止され、通誌局が設置される。</p> <p>大嵙崁五指山の番人が反乱するも、討伐される。</p> <p>台北で欽差行台を建設。</p>								

十九	一八九三	六	<p>射不力の番人が反乱するも、討伐される。</p> <p>明志書院を建設。通判朱上泮が義倉を再建する。</p> <p>台北を省の首府に制定。南雅庁を設置。</p> <p>朝鮮で事変。台湾は戒嚴を施行し、布政使唐景崧が巡撫に任命される。</p>
二十	一八九四	三	

(年表作成 吉田博紀)